파 3C 68

學堂尾崎行雄著

新日本

初卷

發兌
集成社書店
博文堂書舖

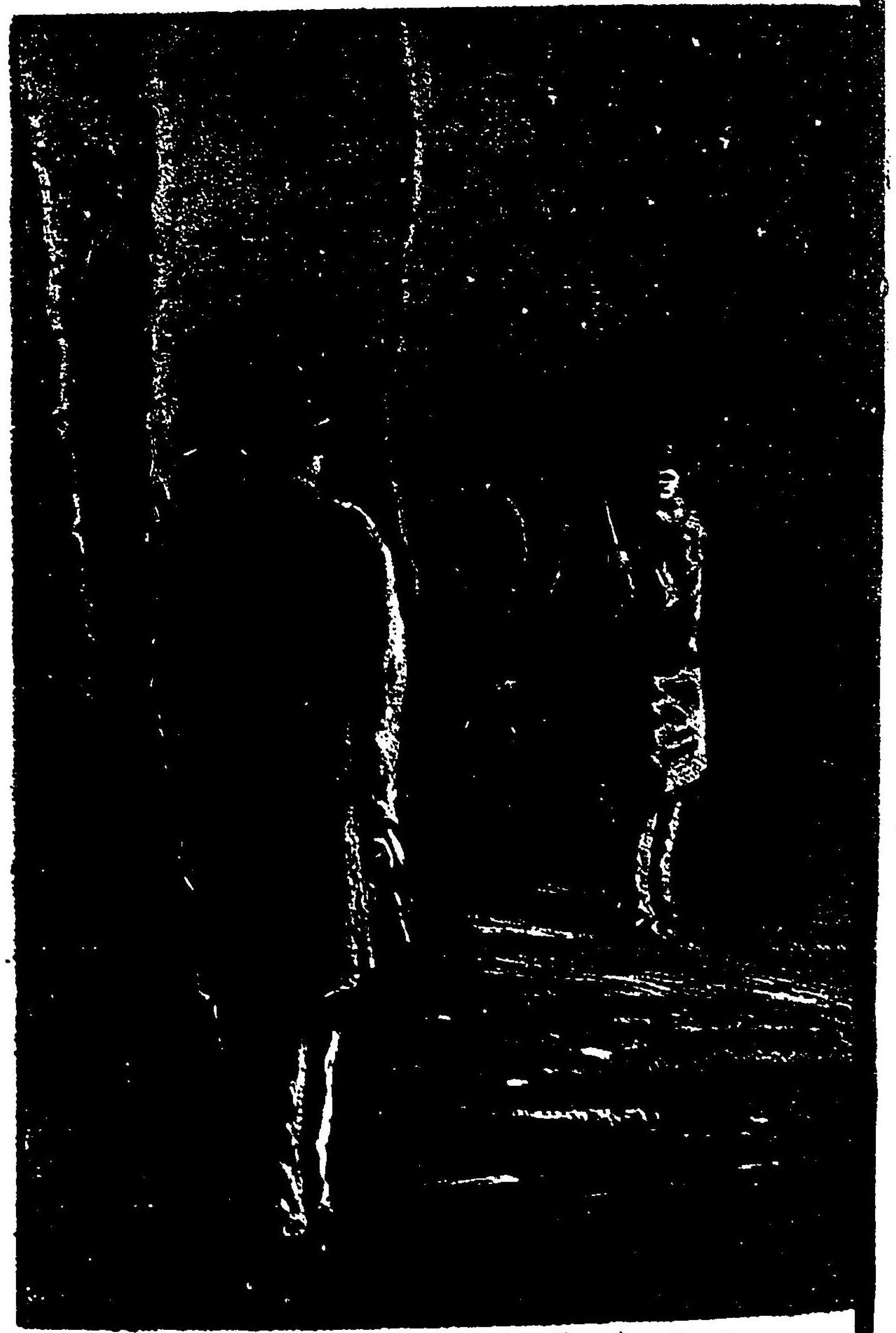
圖ノ古懷間狹桶藏武郊秋

29.7.22

913.6
0982-ｐ
国立国会
29.7.22
図書館
337310

秋野武藏桶狹間懷古ノ圖

小野武藏貴公子と決鬪の圖



秋野武藏貴公子ト決闘ノ圖

新日本初卷目次

第一章　策漢過秦同一意　無人識得賈生心

第二章　驊騮作駒已汗血　鷙鳥舉翮連青雲

第三章　海內風塵諸弟隔　天涯涕淚一身遙

第四章　但不慷慨獻奇謀　意氣兼將身命酬

第五章　出師未捷身先死　長使英雄淚滿襟

第六章　千紫萬紅都狼籍　獨有薔薇落後花

第七章　今日朝廷須汲黯　中原將帥憶廉頗

第八章 指揮能事廻天地、訓練强兵動鬼神
第九章 別有幽愁闇恨生、此時無聲復有聲
第十章 吾拾吾書歸十襲、心謂美人手所觸
第十一章 此身未識爲誰用、慷慨長歌看寶刀
第十二章 寸心金石摩蒼漢、一節氷霜倚碧天

新日本自序

天下ノ大勢ハ潜運默移常ニ俗眼ノ認識スル能ハサル所ニ出ツ唯タ明達ノ士能ク之ヲ未然ニ看破シテ豫メ之ニ應スルノ國是政策ヲ定ムルヲ得ヘシ外交開ケテ舊日本ノ柱石摧ケ幕府倒レテ新日本ノ萌芽發ス爾來本邦ノ大勢ハ駸々乎トシテ舊ヲ棄テ新ニ就クノ方途ニ向ヒ之ニ順フ者ハ成リ之ニ逆フ者ハ敗レタリ政治ノ更革、社會ノ改良、一トシテ新日本ヲ構築全成スルノ運動ニ非サルハナシ國家ノ盛衰强弱唯タ舊習ヲ打破シテ新日本ヲ製造スルノ遲速如何ニ在ルノミ卑見此

ノ如シ故ニ曾テ數々此趣旨ヲ論辯シテ世人ノ注意ヲ促ガセリ

小說ノ義タル極テ廣シ之ヲ大ニスレハ宇宙ヲ包羅シ之ヲ細ニスレハ毫釐ニ攝ス以テ憐香偷玉ノ痴情ヲ說クヘク以テ經國濟民ノ大計ヲ講スヘシ邦儒ノ小說ヲ卑ムハ未タ其何者タルヲ知ラサルカ爲メノミ今春余偶マ病ニ因テ間ヲ得タリ乃チ枯腸ヲ攄テ一種異樣ノ小說ヲ著ハシ題シテ新日本ト云フ以テ聊カ平生ノ持論ヲ隱約幾微ノ間ニ擴張セント欲セル也今マ其初卷ヲ發刊シテ江湖ニ問フ

丙戌臘月

學堂居士　尾崎行雄識

新日本初卷

學堂居士著

第一章

策レ漢過レ秦同一意　無三人識二得賈生心一

君山云春光此ノ如クニシテ學堂兄獨リ書齋ニ閉蟄ス兄

鶯花駘蕩、春色人を惱ましむる哉、嬌歩婀娜双狂蝶を羨み兩鴛鴦を嫉む佳人果して何の思ふ所かある、醉眼朦朧梅を品し柳を評す才子一に何ぞ多情なる、都門百萬の士女蘭舫を墨江に泛へされば則ち輕車を東台に驅る正に是れ皇帝即位後十又九年日麗かに風和らぐの候にして人皆な平生の憂を忘れ一刻千金の佳會を樂むの時なり時に迂粗狷介世と合はざるの讀書生あり學堂居士と云ふ門を閉ぢ頭を靑册黃卷堆裏に埋めて土耳機衰頹史を讀み一讀一擲憂に堪

モ亦小說中ノ人ナル哉
拈花云鶯花駘蕩春色人ヲ惱スノ日ニ方ッ門ヲ閉テ土耳機衰頽史ヲ讀ム者天下果シテ幾何カ有ル居士ノ性行既ニ甚タ奇ナリ其述作豈ニ奇ナラサルヲ得ンヤ

へさる者の如し遂に巻を擲ち慨然大息して曰く「夫れ土耳機は兵馬精悍幾と歐洲全土を席捲したるの强國に非すや然るに朋黨互に傾奪し驕奢逸樂唯た一日の小安を是れ偸むの弊風一たび起てより其衰頽遂に此の如く夫れ甚たしきに至れり今ま本邦目下の形勢たる素より土耳機の末路に比擬すへきに非すと雖とも今にして早く朋黨の私爭を芟除し壯武の氣習を養成し偸安姑息の惰風を一洗するに非すんは國運の衰頽吾れ未た其底止する所を知らさるあり略して之を云へは舊習を打破して新日本を製造するに非すんば國家永く其獨立をも保持する能はさらんとす復た何の暇有てか富强隆盛の幻夢を結ぶことを得ん」と

微笑云慷慨淋漓是レ學堂先生ノ本色

乃ち禿筆を呵して一部の政治兼文學兼歷史小說を著はす左に揭くる所の者即ち是れなり想ふに慷慨度に過くれば心緒必ず亂る今ま學堂居士慷慨措く能はず直ちに亂麻の心胸を披陳して世人の懶睡を警醒せんと欲す意匠の亂雜にして書中の人物に迂粗猖介世と合はさる者多く本書從く尋常讀者の好尙に投せさるは固より當然必至の數なるのみ

拈花云婢僕ノ口ヲ借テ二少年ノ性行ヲ寫シ兼テ婢僕ノ志氣才情ヲ寫ス是レ所謂ル省筆法ト

第二章　驊騮作駒已汗血　鷙鳥學飜連靑雲

二少年あり家と東臺山下靜寂の所に借り炊婢の他更に一婢一僕を雇ふて寓す婢と名を萩江と云ひ僕ハ姓名を大西三郎と云ふ婢の年齒十七八にして僕ハ即ち三十に近し共に善く二主人に事へて書を讀み文を習ふ婢の容色秀麗と雖とも擧止頗る靜肅凛乎として犯す可らさるの風あり復ふ都門婦女子の艶冶妖柔なるに似さるあり其志操風采を以て評すれハ豈に唯た世間の婢女中其類なきのみならんや堂々たる夫人令孃と雖とも恐くハ三舍を避くべし婢萩江一夕僕大西三郎に云て曰く「二君の才學共に優美にして而も苦學怠らず都下の學生多しと雖とも復た其才學と勉勵とを以て二君の右に出る者なかるべし」

雖氏蓋シ亦小說家慣用ノ筆法ナリ居士何ゾ此陳迹ヲ避テ別ニ新路ヲ開拓セサル

微笑云同シク是レ陳迹ヲ踏襲スルナリ之ヲ踏襲スルニ大巧拙アリ是レ識者ノ着目スヘキ所ニ非スヤ若シ必ス新路ヲ開拓スルヲ可トセハ前賢古聖ノ陳迹皆ナ今日ニ踏襲ス可ラサル耶

大西曰く「二君は共に是れ後來有爲の人物なり豈に尋常書生輩の企て及ぶ所ならんや然れとも二君の優劣に至ては僕竊に說なきに非ず試に足下と之を論評して讀書の勞を慰めん乎」

萩江曰く「主家の優劣は妾輩の能く判する所に非ずと雖とも足下說あらは之を聞かんと妾の願なり」

大西曰く「佐久間先生（一姓主人）の書を讀むと捷速ならずと雖とも精細詳密にして毫も遺忘する所なく熟讀翫味して其意に投ずる所あれば必ず之を暗記す秋野先生（一姓主人）は眼光爛々として十行共に下り其讀書の迅速なると他人の挿畫書を繙て單に畫のみを探るに似たるあり然れとも書中の要所は必ず之を撿出して一も漏す所なし故

君山云婢ハ二氏講スル所ノ書ヲ評シ僕ハ却テ二氏ノ相貌ヲ評ス男女全ク其口吻ヲ顚倒シテ婢僕ノ面目躍然帋上ニ現出ス文情細

は其學の博きと遠く佐久間先生に超ゆと雖とも其詳密を比すれば則ち之か下に出づ」

萩江曰く「是れ足下の所謂る二君の優劣論なる乎妾固より二君の優劣を知らずと雖とも秋君の講ずる所は制度憲章及び歷史の類にして佐君の讀む所は常に拓地殖產の書に在ると見れば二君の志趣も亦一端を窺ふべきに似たり」

大西曰く「寔に高說の如し佐君は身体豐肥にして强健秋君は瘦小ならずと雖とも亦肥大ならず虛弱ならずと雖も亦强健ならず爛々たる眼光は蒼白の面色に映して和貌の秀麗を致し口常に閉ちて容易に開かずと雖とも端々は則ち小女の嬌態あり赫として一怒すれは以て六尺

密大ニ作者豪壯ノ氣象ニ異ナルカ如シ

の丈夫を戰慄せしむべく嫣然一笑すれば以て二八の小女を惱殺すべく靜坐椅に倚て默考すれば溫乎として玉の如く唯た其敬愛すべきを見て其畏避すべき所以を知らす畫家をして外交家最上の相貌を畫かしめば必す秋君の相貌を畫かん畫家をして政治家最上の相貌を畫かしめば亦必す秋君の相貌を畫かん然れとも千里の荒原に在て憂を知らす大山前に崩れて泰然動かす百折不撓必す殖民拓地の大業を遂行するは如何なる相貌骨格の人なるへきやと問はゝ先つ世人の想像に浮む者必す夫れ佐君ならん乎」

萩江曰く「足下は所謂る二君の優劣論は既に茲に止まる乎妾固より二君の優劣を知らすと雖とも共に是れ稀世

の俊傑他日名譽を帝國に轟かす者なるも二君必す其類に漏れさるへし」

時に大西は萩江の其論評に服せさるの情を察し俄に話頭を轉して曰く「僕過てり僕過てり女史の聞かんとを願ふ所は、、、、、」

萩江曰く「足下何か故に妾を嘲て女史と云ふや妾は無學無藝の一賤婢のみ何そ女史の稱號を汚すに足らんや足下の妾を弄するも亦甚たし」

大西曰く「足下の才學の優美なる志操の高尚なるは縉紳家の令孃と雖とも到底企及する所に非す足下若し女史の稱號を不滿とせば謹て女丈夫若くは女博士の尊稱を奉らんのみ」

微笑云四人四樣ノ面目寫シ得テ目擊

萩江曰く「足下何の啣む所有てか妾を嘲弄そること此の如く甚たしきや」

大西曰く「戯言は暫く措き女史の聞かんことを願ふ所は佐秋二君何れか醜美の世評に在る可し女史何ぞ世評を聞くことを要せん女史自ら其美とせる所を美として可なり假令世評を聞くも誰か佐君秋君より美なりと云ふ者あらんや女史請ふ世人が女史意中の人と認めて天下無双の美少年と做さゞることを憂る勿れ」

萩江語を聞き赧然として憤色あり莊辭以て大西を詰らんとする時兩主人既に討論會より還て其室に在り婢僕大に驚き走て不敬を謝す佐久間僕に向て二人論爭の事由を問ふ大西答ふるに實を以てそ萩江は嬌羞を含んで臉邊紅を

耳聞スルカ如シ

潮し佐久間は呵々大笑し秋野は婢を顧みて微笑そ

君山云學堂兄動モスレハ則チ高踏勇退ノ意アリ故ニ其武藏ノ家史チ說クヤ則チ日ク祖父ハ山中ニ隱レ乃父ハヽ買人ト爲ルト知ラス武藏ヲ何レノ地ニ置ントスル乎

第二章 海内風塵諸弟隔 天涯涕涙一身遙

秋野武藏是れ其名は東京の人其先世々幕府に仕へて吏績あり武藏の祖父某狷介にして世に媚ふる能はず且つ讒議を以て權臣の旨に觸る權臣口を細故に藉て之を貶謫するに意あり祖父察知して大に憤り初は之を及して君側を淸めんと欲し後ち熟慮して其効なきを思ふ乃ち時弊を論ずるの書一篇を遺し官を棄てゝ甲斐の山中に隱る時に武藏の父民之丞歲尙は幼と雖とも稟性頗る慧敏山中に遊戲して常に群童に長たり漸く長ずるに及び母の家系を說き東都の殷富繁盛を談ずるを聞て心竊に家門を復興し權勢を東都に輝かさんと欲するの志あり其父の沒後母と弟妹とを携へて東都に還り平生の學ぶ所を以て二三の顯貴を干す時

徴笑云當時眞ニ這様ノ人物アリシヿ必セリ玆ニ假名シテ秋野民之丞ト云フ者果シテ何人ナル耶讀者宜ク今日現存ノ人物ニ就テ之ヲ求ムヘシ

に幕政益々衰へて奸佞朝に満ち賄賂附遁之ヶ先と為そよ非そんば復さ一人の能を推し賢を薦むる者あし民之丞風紀の壊乱既よ極まり徳川氏の権勢遂よ久しきこと能はさるを察し慷慨悲憤れ極其姓名を變して買人と為る此時ふ方り士の商を賤しむこと人の獣を見るか如く身士籍よ列する者ハ婚も倚ほ之を商家よ通せそ何そ復た自ら下て買人と為る者あらんや民之丞既よ姓名を變して商買と為り經營百端以て射利を圖ると雖とも士習未た脱せそして商機多くハ齟齬そ後ち幾もなくして戊辰の變あり東都百萬の人倉皇狼狽出る所を知らす老幼相ひ援々て逃る此時民之丞酒と被り大言して曰く「彼の蕞々天地と動かそ者之官兵上野を攻むるの砲聲よ非そや都人士の顔色土の如

く頓轉して四方に逃るゝハ豈よ此快絶の砲聲を畏るゝか為め乎嗚呼天下の大勢を知らさる者何そ共よ商機を談そるよ足らんや東台の一戰ハ驟雨の忽ち來て忽ち去るか如し今ま驟雨ふ畏をて財貨を泥土よ委そ嗚呼天下の大勢を知らさるものゝ何そ共に商機を談そるふ足らんや抑も幕府驕奢柔弱ふ敗れて王政古よ復そるハ理勢の當ふ然るへき所也都人士泰平に慣れて耳曽て干戈の音を聞かそ一朝驟雨に遭遇して百年不止の擾亂と為し而して財貨を泥土に委す嗚呼天下の大勢を知らさるもの何そ共に商機を談そるよ足らんや」と

乃ち都中無頼の徒を集めて道路の遺貲を拾ひ後ち其價を塵芥よ齊ふするの土地邸宅を買て俄よ巨利を得遂よ都門

屈指の富商と爲り交を縉紳貴顯に締して交遊頗る博し秋野武藏ハ其一子也
武藏幼にして意氣俊邁兒童の交を謝して獨り書史に耽る其父精神の過勞を恐れ勸むるに遠游を以てす武藏書史に遠さかり父母の膝下を離るゝとを好まずと雖とも亦夙に英雄成敗の古跡を尋訪し名山大川を跋渉して其文思を養ひ知見を廣むるに意あり今ま父の勸誘に遇ふて之を辭するに忍ひず乃ち家僕大西三郎を隨へて出つ武藏既に別を父母に告け路を東海道に取り函山々下の靈泉に淹留すると數日一日塔の澤に游ひ勝驪山に登り四方を眺臨し獨語して曰く「驪山ハ是れ漢土の勝區、温泉水滑かにしく凝脂を洗ふの處に非すや此區々たる掌大の土塊果して驪山

微笑云好解釋

拈花云漢人ノ浮誇ヲ受ルニ邦儒ノ浮誇ヲ以テス文法特ニ妙

に勝る乎若し然らハ驪山も亦羨むに足らさるなり抑も舜水先生此地を稱して小驪山と云へるも後人小を誤て勝と爲せる乎將た漢土の驪山眞に此風光なき乎漢人の事を皇張誇大にする大抵此類のみ」と
既に行て函山を過くれハ富岳千古の雪を戴て嫣然行客と揖するの狀あり主僕車上に在て詩冊を繙覽す僕後より呼んて曰く「主公々々僕好詩を得たり「且發芙峯下、夕宿芙峯下、行々二三宿、尙宿芙峯下」是れ豈に僕等今日の實況に非ぞや」と
武藏曰く「山陽曾て詩あり「帝擲芙峯雪、擲成崑崙山、黃河即雪汁、却向東海還」浮誇の極あり と雖とも亦山陽才大にして善く戯むれ且つ國体と重んそるの厚きを知るに足れ

君山云称語甚タ奇想フニ是レ漢辭家

拈花云居士ノ暗指スル所ハ勝海舟翁ナル耶

第四章　但不慷慨獻奇謀　意氣兼將身命酬

是より先き武藏の尙ほ東京に在るや靜岡に烈士あり自ら亡國の遺臣と稱して郊外に隱棲し人の籍々として其高節を稱ふるを聞けり故に武藏の靜岡に着するや未た旅裝を卸すに及ばずして先つ高踏隱士の門を叩き名刺を通して曰く「生は是ぞ東都の一學究夙に先生の高節を稔聞して敎を門下に請はんと欲する久し今茲偶ま漫游此地に到る若し一謁を賜はることを得ば明朝更に拜趨すべし」と直ちに踵を回らして歸る時に隱士庭前梅樹の下に在り一少年の語辭莊重なるを聞て既に之を奇とし窺ふて其相顏を見るに及んで益々之を奇とし乃ち自ら出てゝ之を麾き携へて庭中に入り武藏をして共に椽上に踞せしむ武藏隱

士の簡易率直なるに驚き仰て之を見れは身材雄偉、眞古稀に過くへしと雖も毫も衰老の色なし武藏其風采を見て既に凡常ならさるに感し茫然として未た言あらさるに方り隱士初は都下の近狀を問ふて少年の才を試み尋て談鋒を文學に移して其學を試む少年辭氣頗る恭謙と雖とも曾て畏怖の色なく應答整齋意色自若たり隱士深く少年の人物に感する所あるか如く酒食を供へて少年を饗す少年意、望外に滿ち再三謝を致して還る歸寓の途武藏竊に想らく「幕府末路の情形に明なるにして而も直言忌まさると世間復た此翁の如き者なかるべし」と乃ち故らに淹留そること數日、日として隱士の門を叩かさるはなし隱士此に至て愈々少年の才學志趣を奇とし其問に應して備さに幕末の形勢を

說き且つ利害得喪の在る所を論辯し特に奸臣威福を弄して遂りに忠良を傷け以て幕政日に益々非なるを致せるとを說くに至ては慷慨淋漓唾壺殆んと撃碎せらる隱士一夕從容として秋野武藏に語て曰く「余か如きは生きて主家の覆滅を救ふ能はす死して後世に模範たる能はす眞は是れ聖世の棄物空しく粟を糜そるの慚愧に堪へす卿に至ては年少才大勉焉怠らすんは必す王佐を期すべし今や立憲政体創立の期既に旦夕に迫て朝野皆な之か準備に汲々たり卿若し才を負ふて自ら足れりとせは內實外華膽大心小の古訓を守て實事益を求先は功名を國會議場に策せんと決して難きに非さる也當世の事務に通そるもの他日多く國會に出て一時勢民情に適するの政を施

拈花云海舟翁ヲ除テ當時誰カ復タ此卓見ヲ懷ケル者アランヤ隱士ハ必ス是レ海舟翁

微笑云海舟先生歐洲ニ行カス當時歐洲ニ赴ケルハ栗本

され内治以て整頓すべく國權從て張るべきなり幕府の末年歐米諸國の虛喝を以て盛に我を恐嚇するや幕府之を慣ることを知らさるに非ると雖とも時に柔弱不斷の[illegible]政權を握て和戰の間に彷徨し遂に薩長二藩をして勤王攘夷の美名を假て大事を遂行せしむるに至れり幕府若し余か持論を決行し朝旨を奉體し一戰して而して後ちに和を媾せば勤王攘夷の美名は薩長二藩に歸せずして德川氏に歸し薩長の武力を以てするも復た幕府を如何ともする能はさるのみ然るに權臣因循にして余か議を容きそ却て余を以て頑頓無智海外の事情に於て一も知る所なき者と做し戎器購求を名として余を歐州に謫せり是より先き余蘭人に就て蟹行文字を讀み歐米諸國の情

鋤雲翁ナリ隱士ハ是レ鋤雲翁耶

君山云是レ實談實話豈ニ浮誇ノ言ナランヤ

又云得意想フヘシ

形に於て粗ぼ知る所あり然れとも進んて佛港に上るに及んては一事一物悉く余か耳目を驚かさゝるはあらさき既に玻理城（ペリー）に着するや一日麻將軍（マクマホン）の私宴に招かる至れは則ち會者十數名皆な當時の驍將なり太白進領耳既に熱し眼漸く花さかんとする時諸將各〻拔陣陷城の事跡を談して中に北京を陷れ圓明園を燒たるの形勢と說く者あり驕言慢語至らさる所なく支那に一兵の戰に堪ゆる者なし其稱して兵と名くる者は悉く是れ市井無賴の徒のみ彼か三十を以てするも我か一に當るに足らすと云ふに至る余竊に其放言を憤る也時に該將卒然余に向て日本刀の利鈍を問ふ余不平の情に堪ゆる能はす直ちに挾む所の短刀を拔き卓上の銀盤を斫り諸將を顧みて

君山云失意想フヘシ

又云眞ニ是レ卓見幕末何人カ果シテ此卓見ヲ懷抱シタル

拈花云海舟翁ヲ除テ誰カ復タ有ラン

曰く「日本刀の鋭利凡そ此の如きのみ」と心竊に主人の怒に觸れんことを期す麻將軍毫も無禮を咎むるの色なく却て微笑して一劍を齎らして之に頭髮數條を加へ刃に向て一吹すれハ髮條悉く斷す主人更に余を後庭に誘ひ一銃の發射力を驗せしむ轟々瞬時を措かすして各丸皆な寸餘の鐵板を洞貫す余口に之を言ハすと雖とも心實に驚愕す是に於て益々一戰して而して后ち和を締するの得計なるを知り一書を歐洲より將軍に奉れり其要領な曰く「歐洲は皆な國富み兵强し固より蕞爾たる日本國の得て當る所に非すと雖とも世間不平不逞の徒皆な口を勤王攘夷に藉て愚民を煽動せさるハなし此時に方り幕府先つ朝旨を奉して外國と一戰し以て勤王攘夷の實を擧るに非すんハ東台晃山の廟遠からすして狐狸棲宿の地と爲るへし今日歐人の意ハ通商貿易に在て城地併略に在らす彼と一戰するも我か寸土を失ふに至らさるへくして而も世間不逞徒の勤王攘夷論を壓伏するを得へし」云々

微笑云余モ亦曾テ德川氏ノ祿ヲ食メル者讀ンテ此ニ至テ亦髮豎チ眦裂クヽノ感アリ

幕府用ゆる能ハすして薩長のために夷艦砲擊を先んせらる是より天下の人心靡然として薩長二藩に向ひ他の土肥二藩と合して德川氏に背き遂に之を滅するに至れり今にして之を思ふも尙ほ髮豎ち眦裂くるの感あり

是より先き余の佛京に在るや幕府の前途を思ふて寐ねる能ハす憂悶して旦たに達せること多し一日平生の憂思轉た益々切にして殆と飮食を絕つに至る乃ち室を鎖さ

拈花云辞令極妙

又云辞令極妙

し婢僕を遠けて幕府を存せる所以の方計を求め苦慮慘憺愚衷徒らに勞して獨坐深更に達す時に車聲門前に止り戸を叩く者あり余事態の尋常ならさるを怪み自ら出てゝ之を見れは何そ圖らん來者は是れ那翁三世の寵臣虞文德侯ならんとは余驚き迎へて私室に延き坐僅かに定れは虞侯徐ろに夜深叩門の不敬を謝し且つ俄に辞色を正して曰く「我皇帝使君の病正に篤きを聞き夜半俄かに臣を宮中に召し來て訪慰の禮を修めしむ」と余驚起拜謝して曰く「頑健舊の如くにして身に一恙なし」と侯微笑して曰く「身に一恙なき者何を以て輾轉反側寐ぬる能はずして三更に至る乎」と余言を左右に托して要の在る所を蔽はんと欲す侯更に辞色を正して曰く「然れは則ち請て

君山云百雷耳邊ニ落ッ

拈花云虞侯何ッ辞令ニ巧ミナルヤ想フニ是レ稀世ノ外交家

德川政府の傾覆を弔せ」と余之を聞て一語なく唯た目を張て虞侯を直視す侯の曰く「使君恐くは未た之を知るに及はさるべし勤王の兵海陸路を分て江戸城に入り德川將軍自ら位を避けて政權を讓れり其事既に十日前に在りて我か在江戸公使の香港を經て電報する所概略此の如し此報夜に入て始めて達せるも時に皇帝諸大臣を會して正に國事を計議す故を以て直ちに之を使君に通せる能はも今ま我か皇帝臣をして深く日本台君の否運を弔ひ且つ使君の不幸を傷むの意を致し兼て使君の憂愁を慰籍せしむ」と余聞て大息せるのみ

虞文德侯又曰く「人臣と爲て主家の傾覆を支救する能はず人を御するの身を以て忽ち人の爲めに御せらるゝに

君山云春秋游説ノ士ト雖モ決シテ此口辯ナシ襃貶自在抑揚意ノ如シ慶侯モ亦人傑ナル哉

微笑云學堂先生常ニ眼ヲ外交上ノ策略ニ注ク故ニ説キ得テ此ノ如ク精細巧妙ナルノミ慶不徳侯豈ニ真ニ此言アランヤ

拈花云讀者宜ク意ヲ慶侯ノ辭令ニ琴

至る人生の不幸不平實に是より大なるはなし然りと雖とも盛衰興亡は天下の常事のみ試に活眼を開て天下古今を通觀するに何れの邦國か亡ひさらん何れの政府か傾覆せさらん羅馬帝國の強大を以てするも尚ほ蠻族の爲めに亡ほされ我か先帝那翁一世の雄才偉畧を以てするも尚ほ孤島憤死の客と爲まり況んや使君の主家徳川氏の如きは久しく政權を握て日本に君臨すと雖とも其政權は固と徳川氏の有に非す却て朝廷の委託する所なるをや徳川氏は日本の攝政のみ朝廷自ら政を爲すに堪ゆるに至れは政權を返上し退て被治者の群に就くは理勢の當に然るべき所なるに似たり使君何そ深く此當然の命數を傷まん」と余尚ほ大息して止ます

ハレスシテ作者カ隱士ノ心胸ヲ寫出スルノ巧妙ナルニ着目スヘシ

微笑云隱士ヲ寫ス素ヨリ巧妙然レトモ外交家ノ口吻ヲ寫スニ至テハ上ルコト更ニ百層

慶不徳侯又曰く「然りと雖とも我か一世皇帝敗亡後の事跡を推して遙に貴邦目下の形勢を想像すれは亦酸鼻に堪へさる者ある也我か一世皇帝同盟の軍に破られて再ひ絶海の孤島に幽閉せらるゝや公子王孫皆な其頼る所を失して東西に離散し宮殿毀たれ財貨奪はれ鶯花駘蕩の麗春忽ち變して落葉蕭條の悲秋と化し一昨日銀燭歌舞繁華の地は今日頽礎敗垣荒涼の墟と爲れり貴孃辱めを賤卒に受け縉紳首を暴民に授く現に我か三世皇帝の如きも徒跣米國に逃れて口を小學教員に糊せり悲慘の情形今にして之を想ふに尚ほ熱涙潸々の恨に堪へす想ふに貴邦今日の情形亦必す之に似たる者あらん」と余默して言はすと雖とも憤色覺へす面に上る

君山云是レ激シテ眞情ヲ發露セシムルノ秘機

君山云隱士果シテ激法ニ罹レリ

族又曰く「然りと雖とも聞くか如くんハ使君の主家德川氏の政を爲す亦殘虐ならすと云ふ可らす賢を黜け佞を陟せ妄に志士を屠戮して壓制束縛至らさる所なし政を爲して事々皆な輿望に背反し而して民心の之に離をさるハ古今の無き所なり民心既に離れて且つ亡ひさる者ハ亦古今の無き所なり使君若し心を虛にし氣を平かにして深く其因由を求めハ主家の滅亡決して偶然ならさるを知るべし」と

此に至て余復た默する能はそ憤然族に言て曰く「我か幕府政刑の弛廢紊乱せるハ誠に高見の如し然りと雖とも是れ獨り德川氏の罪に非そ亦國勢民情の罪なるのみ故に何人政權を握るも到底歐洲諸國と同一の政法を施

微笑云眞然々々

す能はそ之を施せは國必そ亂る閣下何そ必すしも獨り幕府の苛虐を怪まん且つ夫れ彼の嗷々焉として口を勤王攘夷に籍り以て德川氏を覆へせる者豈に其の尊攘家ならんや亦た唯た取て代ハらんと欲するの徒のみ諸藩の士幕府の恩德に浴するを幾と三百年然るに恩に報し德に感するを知らす一朝之に背て自ら富貴を圖る此不義不忠の徒何そ獨り朝廷に忠なるを得んや」と言終て忿髮天を指そ

爰族膝を進めて曰く「前言そ聊か以て使君の意中を探れるのみ抑も通交貿易ハ五洲の通義日本獨り之に違ふを得そ故に攘夷（公此語を發するは常て笑容あり蓋し日本人の野郎自ら大とし他の文明國を蠻夷視そると笑へるなるべし）の一事ハ幕府も朝廷も決して之を遂行そる能

君山云蘇張再生スト雖モ虞侯ノ口辯ニ讓ル亇百歩

又云隱士果シテ虞侯ノ網中ニ陷レリ

拈花云危殆急極日本ノ存亡ハ隱士ガ一諾一否ノ間ニ在リ

はそ而して勤王の實に至ては幕府と諸藩と齊しく之を擧るとを得へき也然るに貴邦勤王の士幕府を佐けて王事に勤むるとを爲さす一朝德に背て德川氏を仆す是れ唯た理義の許さゝる所なるのみならす亦政略上の得計に非す使君の憤懣豈に偶然ならんや使君既に所謂る勤王攘夷家なる者の與意一に巳か富貴を圖るに在るとを看破せ何そ狂瀾を既倒に回へすの大計を講せさるや」と余言を聞き蹶起して曰く僕不肖と雖とも計を求むると久し未た一計の可なる者を得さるを如何せん」と是に於て虞侯余か說くへきを知り膝を進めて那翁三世皇帝余に陸兵一萬戰艦十餘艘を貸して回復を計らしむるの意あるを密話し且つ言て曰く「起死回生の機唯た今

拈花云讀ンテ此ニ至テ始テ安意太白ヲ傾ク

微笑云此時兵ヲ借ルモ未タ必スシテ國ヲ亡ホスニ至ラス隱士何ソ斷行セサル

日に在り此機一たひ去れは復た得可らす」と余か慫慂勤々として動く然りと雖とも兵を他邦に借るは國家の大事其關係唯た一德川氏盛衰起仆の比に非さる也故に公に請ふに熟慮の暇を以てし決答を明夕に約して別る是より理心と憤情と交も余か脳中に爭ふを數時間理心遂に憤情を制し寧ろ幕府不忠の臣と爲るも倚は兵を他邦に借て國家の大患を釀生するに優れることを悟れり乃ち車を馳せて虞侯の邸に到り告くるに實を以てす侯陽に嗟嘆して余か愛國心に富めるを稱せりと雖とも心竊に辭の以て其皇帝に復奏すへきなきを憂へしならん此時に方り佛帝の權勢は赫灼として海を出るの旭日の如く歐洲列國の帝王皆な喜憂を其一顰一笑に挾まさる

拈花云男アリ智アリ作者ノ隱士ニ擬スル所ハ必ス海舟翁

君山云隱士ノ誰タルハ問ハスシテ可ナリ其說ク所ノ正確動カス可ラサルニ至テハ讀者宜ク之ヲ三復スヘシ

れなし余をして若し一時の憤懣に堪へきれず兵を佛帝に借りて回復を圖らしめば薩、長、土、肥、諸藩を粉碎して幕府の權勢を復舊せんこと一擧手の勞に過ぎずと雖とも此の如くせハ人心固より德川氏に服せず佛冦從て至るべし抑も廢疾深夜來說せるの時に方り日本安危存亡の大機を隻手に掌握せる者ハ余に非ずして誰ぞ余か一時の憤情に制せられさりしハ寔に本邦の大幸と云べし卿（秋野武藏と云）ふの奇才天縱なるや名利を以て誘ハれ憤激を以て誘ハれ諂媚を以て誘ハれ百計悉く盡して惡路に誘はるゝと必ず他日に多かるべし卿夫れ唯た之を忠愛の大義に問ふて去就を斷せよ得失の爲めに心を動かさるゝと勿れ」と

歇刻の長談漸く終れバ玉山既に頽れて鼾睡雷の如し然り而して高踏先生辭氣懇懃備さに才を愛するの情致を極む秋野武藏ハ先生の高談を聞て名聲の虛傳ならさるを感し幾たびか其厚遇を默謝して去る時に眉月山陰に入り街衢人なく犬聲遙に相ひ答ふ

君山云義元ハ是レ慓悍ノ席主ノミ學堂兄ノ之ヲ嘆惜スルハ何ソヤ
微笑云學堂先生素ヨリ義元ニ敬服スル者ニ非ス然レ𪜈此ノ如ク書セサレハ武藏ノ行旅寂寞ヲ覺フ故ニ聊カ之ヲ捻出セルノミ

第五章　出師未捷身先死　長使英雄涙滿襟

日色黯淡、雲煙悽迷、曠莽たる平原唯た數株の衰柳痩松を留むるのミ柳下よ一小石碑わり題して今川上總介義元戰死所と云ふ武藏低徊去る能ハそ僕大西三郎を顧ミて曰く「義元駿豆の間よ起り英雄を駕御して傍近數州の地を席捲し遂よ驍勇四萬を率ひて府城を發し諸將を集めて置酒高會し杯を德川家康よ屬して「此行必そ尾州を平け勢江二州を經て京師ふ入り以て天下よ號令そべし」と云ふに方てハ氣海內を吞み眼一世を空ふそ共行く々々大高、蹈懸、鷲尾、丸根の諸城を屠り進んて此處に陣そるよ及んてハ意氣盛滿、信長の首を旦夕よ期そ蓋し亦盛なりと云ふべし然り而して風雨祟りを爲し一敗地よ塗れ百世不

拈花云西都ニ至テ花月ニ流連セサル者ハ無情漢ノミ學堂居士ノ武藏ヲ寫ス何ゾ夫レ酷薄ナルヤ知ラス今日現ニ此ノ如キ人物アル乎

祀の鬼と爲る嗚呼亦慘矣衰柳痩松豈に英雄當年の恨を知る乎何ぞ多恨の游子をして依々去る能はず轉た感愴に堪へさらしむと此の如くなるや」と

鳴海を過きて資持の機智に感し㊀熱田に詣てゝ信長の權數を想ひ㊁名古屋に宿して城地金鯱の嘗て聞く所に劣れるを怪む蛤肉を桑名に喫し神廟を度會に拜し擲筆山を望んで其庵名に驚き逢坂山を過きて歌仙接隱の跡を訪ひ轉々して遂に西都に入る西都特に山水秀靈舞姫嬌艶を以て名あり勝を西郊に探れは花顏人を招き青を東山に踏めば鶯喉客を留む㊂耳目の觸るゝ所悉く傷心斷腸の種子に非さるはなし然り而して武藏素と歌舞賭酒の女を喜はず官之を公許し士之を公聘するを以て國家道德上の汚點と爲す故に

微笑云武藏ハ是レ書中ノ主人ニシテ學堂先生ノ藉テ以テ自ラ其意氣境遇ヲ寫ス所ノ者ナリ西都ニ遊ンテ妖姬艶娼ニ流連セサル者豈ニ獨リ書中假設ノ人物ノミナランヤ

偶ま辞す可らさるの招請に應して氷樓山閣に飲めば見る者皆な武藏の眉目秀清を稱せさるはなく燕肥趙痩環て其一顧を求むと雖とも武藏竊に其輕佻を賤み端坐莊容恬として知らさる者の如し若し艶語以て其意を探る者あれば則ち顧みて他を言ふ武藏の性情高く時人の表に出ると凡そ此の如し故を以て西都に淹留せると數旬の久しきに及ふと雖とも唯た曩時王室式微の情形を故老に問ふて暗に忠義の涙を灑き勝區名蹟を四方に探て博く諏訪考古の資に供せるのみ倚紫偎紅は遊昧に至ては夢想にだも之を知らさる也人或は評して迂愚と云はん蓋し亦文明人士は本色なるのみ

㊀傳へ云ふ大田道灌夜を冒し諸軍を率ひ海に沿ふて疾

く進む渤然として怒汐突起し衝き來て隊を乱る人馬皆な狼狽して出る所を知らす道滙乃ち大呼歌て曰く

遠くなり近く鳴海の濱千鳥擲の滿干え聲よこそよれ

是よ於て諸軍其意を領し鬨聲を逐て道を得師も亦利わりと臨機の敏才文武兼備と云ふ可きなり

㈡今川義元の驍勇四万を提けて西上そるや織田信長之を邀撃せんと欲し單身馬よ騎して出つ從者僅よ千有餘騎人皆な相ひ顧みて危色あり信長熱田の社を過き馬を下て曰く社内よ兵器の聲わるを開く是れ神我を助る也我れ必す克んと衆心稍や安んそ信長拜禱して旗屋口よ到る比ろ揚言して曰く白鷺一双飛翔そ是れ亦熱田神の感護也と衆心益々安んじ軍氣頗る振ふ信長卽ち鞭を揚けて疾く馳せ義元を桶狹間よ襲ふて之を斬る

㈢元祿年間淡州の人服部嵐雪俳諧を以て世よ鳴る其東山遙望の吟よ曰く

蒲團きて寐たる姿や東山

一時人口よ膾炙そ後ち壽餅居士なる者あり東山の詩を賦して曰く

平撫群巒不籍筇、嵐光一々撲眉濃、前人道破至都景、軟翠連東有臥容、

時人其一結善く嵐雪か警句を譯して出藍の色あるを稱す

拈花云忽チニシテ慷慨長歌、忽チニシテ悉情高踏、忽チニメ投機射利、忽チニシテ勤王佐幕、忽チニシテ外交ノ偉略、忽チニシテ英雄ノ遺恨、忽チニシテ雲煙恍逐、忽チニシテ陽和駘蕩、鐵騎馳突ノ狀尙ホ目ニ在テ佳人嗚泣ノ聲亦耳ニ徹ス變化自在文思湧クカ如シ

第六章 千紫萬紅都狼藉 獨有二薔薇落後花一

少女歳正に二八徒跣乱髪身に弊衣を纏ふて走る後に狀貌獰悪なる夫妻あり亦徒跣にして之を追ふ少女遂に逃る可らさるを知り路傍の旗亭に走り入り疾呼掌を合せて隠匿を請ふ夫妻忽ち追及し少女を捕へて髮を攫み背を毆ち備さに苛殘醜詆を極む行人罵聲泣聲を聞て店頭に蝟集し喧々嗷々或ハ少女を嘲り或ハ醉漢狂婦を罵る旗亭の主人見て頻に鬻壚もと雖とも口唯た夫妻の宥恕を求るのみ身を挺して之を援ハさる也

時に游子二名樓欄に據て眺臨し白砂青松相ひ映對し浮鷗閑に波に從ふて上下するの光景に流連して依々去る能ハず一人他に言て曰く『今樣に所謂る須磨の浦和の瓜作り、

瓜を人よ取られドと、守もる夜わまたよ成りぬれば、瓜を
枕よつい寐たり」と云ふ者豈よ此地の農夫を咏そるの歌
乎余其寓意の在る所を知らさるな』と
忽ち門前喧騒の聲を聞て下瞰それハ男女老幼蝟集して山
を爲そ乃ち婢の茶を齎らせる者を顧みて事由を問ふ婢の
曰く「貴客幸よ高慮を勞する勿れ是れ弊村常有の困難事、
敢て貴客の高慮を煩ハすよ足らさるなり」と
毫も其固由を説かさる也時よ少女泣喚の聲高く樓上よ徹
す幾と痛苦に堪へさる者の如し是よ於て一客氣を焦燥し
急よ婢を呼んで曰く「是れ果して何等の悪聲ぞ冗語を止
めて速よ事由を告けよ」と
婢其辞色の莊嚴なるよ驚き倉皇梯子を下り去る時よ泣喚

の聲愈々切なり一客益々焦燥し他を麾ひて急よ樓を下り
一障を隔てゝ竊よ之を窺ふ慘なる哉痛なる哉少女既よ鐵
拳乱打の下よ倒れて柳眉倒まよ竪ち桃唇堅く閉ち面上處
々よ流血を見る一客一見して俠憤よ堪へそ憤然獨語して
曰く「何者の狂夫婦か敢て此暴虐を逞ふそ」と
即ち他を目して急よ障を開き突然醉漢狂婦を蹴倒し直ち
よ少女を提けて去る夫妻氣を奪ハれ僅よ之を回復して左
右を顧れど少女既よ無し是よ於て大喚狂呼徧ねく樓の上
下を探り遂よ馳せて屋後の小亭よ入んとそ一壯士亭前よ
屹立し手を開き之を攔住して曰く「此亭そ是れ我か主人
の借有そる所何者の暴人ぞ敢て之よ乱入せんとするや
若し强て乱入せんと欲せば先つ我を殺して過きよ」と

君山云恰モ是レ劇部ノ光景

醉漢狂婦拳を振ふて之を襲ふ少女障隙より此光景を見自ら出てゝ死地に就かんことを請ふ秋野武藏阻止して許さす少女を提け障隙を開き椽端に出つ夫妻一見して怒氣天に冲し大西三郎を舍てゝ直ちに武藏に向ふ武藏疾呼して曰く「待て、唯た待て我か一言を聞け、汝等暴虐幾と此少女を殺せり之を汝等の毒手より奪て蘇生せしめたる者ハ我なり即ち少女再生後の生命ハ我か有にして汝等の有に非す汝等若し此理を解せす強て少女を奪ハんと欲せハ宜く暴力以て之を奪ふへし我も亦暴力以て之を防護せんのみ」と

乃ち懷に短銃を探て二人に擬す二人逡巡爲す所を知らさる也武藏微笑して曰く「然りと雖も汝等の少女に於ける

微笑云平生妖姬艷娼ヲ疎斥スルノ人ニシテ薄命ノ佳人ヲ救フ何等ノ俠骨

必す俯育の恩あらん之を以て其勞費を辨せよ」と小錢囊を二人の前に投す鏘然聲あり二人遽に之を拾ひ開かんと欲して開く能ハす蓋し田舍漢始て洋囊を手にし未た開鎖の法を知らさる也武藏見て之を愍み三郎をして之を開くの法を敎へしむ二人黄白貨累々其內に堆く重量亦少なからさるを見て意、望外に滿ち滿面の怒色忽ち變して滿面の喜色と爲る醉漢狂婦を顧みて曰く「假令頑物（少女を云ふ）をして我か意に從ひ身を神港の娼家に委ねしむるも買酒錢を得るの多き恐くは此に加へさるへし」と

又武藏に謝して曰く「謹んて恩家の賜を拜す少女の一身は唯た恩家の左右する所に任かす」と

叩頭數回悍婆を携へて去る嗚呼無賴の小人唯た錢を愛し

君山云此間能ク男女少長ノ性行ヲ寫シテ簡捷明断人ヲシテ身親シク之ニ接スルノ思アラシム是レ小説家得意ノ伎倆ト雖モ學常兒ニ在テハ抑モ亦末技ナルノミ讀者若シ此類ノ細節ヲ以テ此書ヲ評セス他ノ大策略大見識ニ就テ褒貶ヲ下サハ著者始テ遺憾ナカルヘキ乎

て人身の貴きを知らす少女を罵ひて一醉を買ハんと欲するに至る焉ぞ其無智を愍んて其殘暴を惡まさるを得んや夫妻の既に去るや少女始て鬼魔界を脱して人間に還れるの想あり一たびハ自から顧みて其慶福を喜ひ又一たひハ生面未知の貴公子をして故なく己か爲めに巨財を消靡せしめたるを憂ふ後ち氣愈々治まるに及ひ前途一身の處方を思ふて爾時鬼漢狠婆の殘手に死せさりしを恨み紅涙潸々漣りに落ちて其弊衣に濺く武藏温言以て之を慰撫し且つ其經歴及ひ依怙を問ふ少女漸くにして涙を拂ひ愁然答て曰く

「妾の歡喜以て再生の高恩を謝せす却て啼泣以て貴人の憂を加ふる所以の者ハ唯た高恩に報するに道なく就て依るへきの知人親戚なきか爲めのみ」と

語終て涙落て雨の如し時に樓の主嫗來て少女の爲めに再生の恩を謝し且つ語るに少女の履歴と醉漢狂婦の人と爲りとを以てす嫗語喋々喃々時を移して尚ほ止まず著者其冗長繁縟にして讀者の倦厭を招かんことを恐る今ま請ふ主嫗に代て其語れる所を約言せん

少女ハ元と西都富家の產幼にして父母を失ひ亦兄弟姉妹なし時に醉漢狂婦亦西都に住して夫ハ賭博を事とし妻ハ其乳を賣て良家の子女を養ふ少女の親戚之を彼の悍婦に托して養ハしむ其稍や長ずるに及んて少女の親戚商機を誤まり一敗地に塗れて之く所を知らす遂に少女養育の送資を絶つに至れり狂婦此に至て頗る少女を疎んずと雖とも其殊色あるを見るや竊に之を他日に利するの意あり後

拈花云小姐ノ性情恰モ武藏ノ常ニ夢想スル所ニ投ス其得意想フヘキ也

ち夫妻事を以て其徒の爲めに逐れれ少女を提け來て須磨の近村に寓そ慓悍暴戻一郷の怖惡する所となる少女稍や朱と黙し粉を施すとと解するに及ひ之を神港歌舞の家に送て媚嫵强笑の術を學えしむ少女日夜に啼泣して毫も之を習はさる也其家之と如何ともする能はそして醉漢に返そ狂婦大に怒て毆打折辱至らさる所なし驅役之を近隣農家の使役に供して苦難堪ゆ可らさるの業を執らしめ其得る所の賃錢は醉漢皆な之を奪て酒を買ふ以て少女をして青樓歌舞の逸樂を悟らしめんと欲せるなり然るに少女毫も勞苦を厭はず却て狹斜錦衣の人と爲ることを厭ふ少女の年歯益々加はるに及ひ妖姫艷娼を惡むの情轉た愈々增加せるを以て夫妻計の施そへきなく日夜之を毆打折辱して

必そ其意に從はしめんと欲す少女其苛責に堪ゆる能はそそ徒跣亂髮走て援けと近隣に請ふと數々あり一日夫妻の説諭特に苦み其折辱亦特に苛虐を極む少女悲憤に堪へは身を水底に沈めて此苦痛を免れんと欲し徒跣海を指して走る然るに夫妻の追躡甚た急にして死も亦之を得可らそ終に路傍の一旗亭に投して端なく秋野武藏の救ふ所と爲れり

武藏主媼の長譚を聞き頻に嗟嘆して少女が薄命を憐み顧みて之に言て曰く「卿か境遇若し今ま主媼の説く所に違はそ且つ卿永く乳媼と分ることを厭はすんは余常に卿を東都に伴ひ實妹を以て遇そべし」と

少女武藏か山よりも高く海よりも深きの殊恩に感泣して

微笑云武藏ノ小姐ヲ救ヘルハ素ト一片ノ義俠心ニ出ツ之ヲシテ尋常一樣ノ婦女子ナラシムルモ尚ホ善後ノ計ヲ求ントス況ヤ小姐ノ性行高ク時俗ノ上ニ出テ粗ホ武藏ノ人ト爲リニ類スルヲヤ

答ふることを能はす主媼語を聞て愕然たり傍より頻に少女を促かして恩を謝せしめんと欲すと雖とも少女唯ゝ潸然感泣するのみ讀者須く知るべし同しく是れ紅涙と雖とも此時の紅涙は全く曩時鬼漢狠婦の毆打を受けし時の紅涙に異なることを主媼遂に少女に代て恩を謝し又少女の爲めに賀し又武藏の爲めに祝し且つ恩遇の永く渝はらさらんことを三請す少女漸く頭を擧けて曰く「妾無智と雖とも豈に公子は恩を謝することを知らさらんや唯た憂ふ生面未知の公子より既に再生の高恩を拜し重ねて俯育の深恩に浴するは幾と是れ夢中の夢一覺即ち形影なからんことを縱し之をして千年不覺の夢ならしめは妾亦實に恩に報するの道なきを憂ふる也」と

語終て更に愁然たり武藏曰く「卿夫れ小恩の報し難きを憂ふる勿れ余既に卿を用ひて奇功を奏し今日の小恩を十倍して報せしむるの成算あり」と

遂に少女を携へて四方を漫游し之に學藝を授けて天賦の美質を發育せしむるに決す僕大西三郎聞て竊に憂色あり

第七章 今日朝廷須二汲黯一 中原將帥憶二廉頗一

縉士三名白券を買て滊車に搭す各々一室を占めて沈思默考そると多時一縉士の容顔俊秀ある者起て窓を開けハ野馳せ屋走り忽ちよして山忽ちにして平原忽ちよして危橋忽ちよして墜道飛禽却行し泊舟前進そ既よして黄雲滿地男女相ひ和して太平を謳歌そるの所よ來て該縉士滿面喜色を呈して俄に窓邊を去り界障を開き隣室の友を呼んて曰く「兄何ぞ默坐深考を止めて米穀豐登男女歡樂の祥狀を見さるや今を去る僅に兩三年農民困弊を極めく其田と肥培そる能ハす加ふるよ天時の不順を以てして風水の災連りに到るに方てハ嘆嗟の聲山野に充滿し農民困弊の餘波延て他の諸民に及ひ國家の事復さ爲す可ら

微笑云聞ク巻中主位ヲ占ムルノ人物ハ皆ナ暗ニ比擬スル所アリト而シテ畢常先生常ニ此説ヲ爲セリ縉士ハ是レ著者耶

ざるか如くなりしも今や農租未た輕減せすと雖とも人民既に鬱屈の悲況を脱して前途多望の位地に立ち人皆な指を屈して國會開設の當日を數ふ而して其之を數ふるや年を以てせすして月を以てす嘆嗟の聲其跡を收めて愉々の色人々の面に上れるも亦宜なる哉抑も民心鬱屈すれハ患害未た深からずと雖とも之を憂ふるハ則ち深く之を憂ふると深くして人々互に吊すれば想念上の憂患遂に實憂に倍蓰するに至る今日國會開設の期稍々近くして人民皆な自由幸福の天地に近つくを喜ひ實憂未だ全く去らずして想念上の憂患既に其跡を滅し世上の形勢大に前日に異なるハ蓋し偶然に非ざる也」と

時に隣室の一縉士亦界障を開き戸に倚り閾上に佇立して

曰く「此行松兄は中國諸縣を攻めて之を畧し竹兄ハ九州諸縣に游説して之を下し僕ハ即ち三越の同志を鼓舞して敵黨と挫折し轉して奥羽諸州に入らんとす計策粗は熟すと雖とも負任决して輕きに非す各々善く此行ハ目途を貫達し他日京に還て功績を黨友に語ることを得む幸甚」と

年長の一縉士從容髭を撚し徐ろに他の二縉士に答て曰く「僕先つ秋色を嵐山に賞し志士を坂神に會し進んて三備防長を巡游するの任に當る、、、、、」

語未た終らさるに方り容顔俊秀の一縉士急に喙を容れて曰く「攝河を下し三備防長を略するの事ハ稻公の兄に托する所秋色を嵐山に賞するハ一事ハ知らず誰の托する

枯花云這ノ風流政治家果シテ是レ何人ソ

所あるを」と[illegible]年長縉士嫣然微笑して曰く「佳人約あり僕實に之に背くに忍ひさる也」と[illegible]二縉士相ひ顧みて笑ふ年長縉士襟を正し再ひ謡を撫して曰く「冗話は暫く之を措き中國は古より攻め易く守り難きの地と稱す僕一たひ足を擧れは說て之を下そこと實に易々たりと雖とも竊に恐る其志士或は他日に背かんとを且つ防長二州に至ては敵黨の蟠んで以て其根據と爲す所之を下すは決して容易の業に非す僕が力能く之を下さは二兄視て奇功と爲せ假令之を下す能はさるも請ふ之を僕が拙劣に歸する勿れ然りと雖とも僕も稍や憂ふる所は唯た防長二州のみ二兄に至ては則ち然らす一

は九州に向ひ一は東北諸縣に向ふ九州は人素樸にして節義に富み東北諸縣は人迂なるに似て質は然らす我黨の主義を此兩地方に擴むるの道唯た心胸を吐露して我輩忠君愛國の至誠に感動せしむるに在り毫も隱蔽する所なく我輩の赤心を吐露するも兩地方の志士倘は之に應せすんは是れ開明の氣運未た西南と東北とに及はさる也其罪志士の無學に在て我黨の不勉に在らす我黨復た何をか憾まん他日西南東北の人政史を讀んて帝室の尊榮と人民の輿望とを壓抑するに在らすして却て之に聰從するに在るを知り又之を國會議場に實驗して皇帝無責任の大義に反對する者は則ち神聖無過なる皇帝陛下をして人民譏譽の衝に當らせ奉らんと欲する者なると

君山云辭意莊重周到ナルニ因テ考フレハ松村氏ハ是レ矢野文雄氏ノ擬名乎

拈花云恐クハ然ラサルヘシ僕竊ニ以テ故小野梓氏ト爲ス

微笑云著者ノ暗指スル所ハ沼間守一氏ニ在ル耶

拈花云沼間氏疑ナシ何ソ之チ撫スルヲ得ンヤ

微笑云此時爲ソ沼間氏ノ必ス美稱ナキヲ保ス可ンヤ

君山云梅山竹野ノ二氏ハ果シテ是レ何人ソ著者必ス指擬スル所ノ人アラン

を知らば必ず前過を悔て我黨の主義に賛成するに至るべし我黨の期する所ハ帝室長久の尊榮に在り又國家永遠の慶福に在り假令ニ兄一游して西南と東北とを風靡する能はざるも毫も此行の無功を憾ひとを要せざる也今日の行ハ農夫の樹を植ゆるに譬ふ直ちに果實と收むる能ハさるハ當然のみ若し植ゑて直ちに果實を收むるを得バ事望外に出つ二兄夫き急激の奏功を期せそ唯ふ加餐安眠して國の爲めに自愛せよ」と

辭氣慇懃與に年長縉士さるに愧さる也二縉士深く松村氏（是れ年長縉士の姓）の贈言を謝そ

既にして滊車長野に着す停車場外人山の如く鐵欄を擁して衆目皆な下車の客に注ぐ三縉士列車を出れハ場外騒然歡呼の聲沸くか如し俗客皆な此光景に驚く蓋し信濃國同志者の三縉士を迎ふる也三縉士衆に圍繞せられて撰殷の旅館に入り其日直ちに演說會を開き終て懇親會に臨む會者聽衆皆な改進主義の善美なるを稱し終始之を守て渝ハらさるへきを誓ふ

是より梅山氏（是れ一縉士の姓）ハ高田に出てゝ越前に入り竹野氏（是れ容顏俊秀なる一縉士の姓）ハ馬關に出てゝ九州に入り松村氏ハ木曾路を經て西京に入る

第八章　指揮能事廻天地　訓練強兵動鬼神

秋野武藏に莫逆の友あり佐久間勇と云ふ山口の人なり北父長門夙に帝室の式微を嘆し日下義助高杉晉作等の諸名士と深く結托し名を攘夷に借て幕府を仆し以て政權を王室に復せんと欲し千艱万難備さに嘗めて身死地に陷さるもの數次、幸に天祐を得て一生を萬死の中に全ふす　聖叡文武なる今上皇帝陛下勅を勤王諸藩に下して幕府を討せしむるに及んてハ佐久間長門西都に在て諸將の向ふ所を指畫せり部署嚴肅兵機敏捷諸將皆な之に服して張良陳平の再生と稱す維新の功業ハ長門の參畫に出るもの多く雄名籍々海内に傳播すと雖とも惜ひ哉大業既に成るの後ち幾もなく怨家の爲めに刺され命を馬上に墜せり其子勇幼

拈花云賢ナル哉此人、蕭韓長平集ツテ一人ト為ル著者ノ比擬スル所ハ西郷翁乎泉山先生乎抑モ二人ヲ合シテ之ヲ一ニセル乎

君山云是レ必ス大村益次郎氏

微笑云豈ニ廣澤兵助氏ナラサルヲ知ンヤ

にして深沈大志あり長ずるに及び其母之に一書を投けて曰く「是れ汝か父の深く篋底に藏まで容易く人に示さゞりし所の者也汝か父常に勤王諸藩の功に誇て專恣に趣かんことを憂へ早く藩籍を奉還して封建割據の因習を一洗し投票公選法を用ひて愛憎人を取舍するの弊根を絶滅せんことを期せり然れとも國家擾乱の餘弊未た除かすして殺氣海内に充滿す或ハ志を貫達するに及ハすして斃るゝの虞あらんを恐れ間ある毎に筆を執て前途の計畫を記述し以て汝の其志を繼かんことを期せり今にして之を思へハ豫め暗刺の災を知て故らに之を遺せる者の如し我れ復た之を讀むに忍ひさる也汝若し一點の孝志あらハ此書の記する所を守て終始渝ハる勿れ」と

言終て熱涙老顔を濕ほす勇一語して悲痛感慨に堪へす必す父の志と繼くへきを誓ふ此時に方り勇か亡父長門の恩顧提撕に因て身を立てたる者朝廷に充滿し位高く祿豐かに備さに富貴の樂を極む後ち勇が學業粗ぼ成るに及ひ諸氏皆な之を朝廷に薦めて舊恩を報せんと欲すと雖とも勇堅く父の志を守り且つ朝祿を以て私恩に報ひるを不可とし固辭して應せす幾と交を同郷の顯貴と絶つに至れり是より先き勇の某義塾に在るや深く懶惰柔弱の學生を輕賤し交を此輩に結ふを以て百害有て一利なしと爲せり衆皆な勇の擧止莊嚴にして意氣甚た傲れるを見て之を悪むと雖とも勇毫も之を意とせす却て懶惰生の爲めに容れられさるを喜ひ益々其言行を倨傲にして無用の交を避けんと

拈花云著者ノ其學塾ニ在ルヤ亦實ニ此ノ如クナリシ
君山云果シテ然ラハ學堂兄勇ヲ藉テ自ラ寫ス乎

を力めたり他人をして此の如き矯激の言行あらしめば必ず諸學生の爲めに若先ぐれ遂に校中に留まる能はさるに至るべしと雖とも勇ハ是れ明治政府を三分して其一を有せる山口縣下第一流れ名家にして朝貴數々使を派して其安否を訪問せしむ故に校長塾監皆な之を厚待して諸學生の勇を苦責することを許さゞるなり又學生中に在て年稍や長し望と官途に繫く者の如きハ若し之を薄遇せば爲めに立身の路を妨けんことを慮り巧言令色以て之に諛事せり時に勇年尚ほ若かしと雖とも慧眼忽ち此輩れ心腑を看破し之を賤蔑すること愈々甚たしきに至れり勇の賤蔑愈々加て此輩の之に事ふること益々謹めり是れ他なし倨傲の人ハ諂諛を以て其歡心を買ふことを得べしと想信せるか爲め也

君山云學棠兄ノ其學塾ニ在ルヤ亦實ニ此事アリシ乎

勇固と狷介にして交を人に許さずと雖とも嘗て其校に游學せる一商家の子に至てハ勇之を拒絶せず却て交を求め日夕互に往來して疑義を討究し交情の親密なる幾と兄弟の如し人皆な其所以を怪まさるハなし二生の既に數程を卒るや塾舍を去り家を東台山下幽寂の處に借て共に居り互に相ひ奬勵して其學業を研磨せり二生か交情の濃厚なること凡そ此の如きを以て秋野武藏の漫遊の途に在るや數々書を佐久間勇に送て旅中の情形を報そ今ま其都之城より送れる者一通を抄出して諸君の一閲と煩ハさん乎

秋氣正に凉爽賢契恙なきや否や僕頑健舊の如く日に數里の山河を跋渉して身心益々壯快なるを覺ふ幸に賢慮を勞そること勿れ僕到る所風土民俗を察せんと欲して徒

拈花云書牘ニ托シテ胸中ノ秘機ヲ漏ラス是レ一種創体ノ新文字

微笑云蓋シ是レ實況

らに愚衷を勞す大勢は歸向は僕か豆小の眼孔の容易に看破し得る所に非すと雖とも四方の人皆な立憲制度を受用するの準備を治め諸政黨軋轢の盛んなるは明治十五六年の比類に非す僕熊本に於て改進黨の遊説客竹野茂雄氏に邂逅し就て黨勢消長の景況を叩けは則ち云ふ「到る所志士の優待を受け演説懇親の會を開く毎に聽者會衆甚た多しと雖とも能く其主義の善美なる所以を了解する者少なくて却て之を了解する能はさる者多きに似たり」と僕の見る所を以てするも一般の人智は意外に卑低にして未た立憲制度の本旨を解せさる者多きか如し且つ九州諸縣は官府の縁故頗る深くして其勢力亦強大なるを以て改進黨の諸士更に一層の盡力を加ふる

君山云眞然々々僕モ亦常ニ此感ヲ懐ケリ

に非すんば勝を國會議場に制するもの夫れ必す保守黨ならん乎僕竊かに國家の爲めに之を憂ふ

抑も民智の卑低なると遠く僕等の都門に在て推想せる所に下るかゆへ單に勝敗の權略上より觀察を下せは成るへく穩當着實俗耳に入り易きの言説を以て之を誘導せさる可らすと雖とも若し國家の大計上より論すれは遠く時俗に超過する所の新主義を唱へて世間の耳目を驚破するを善しとす然らすんは彼等因循今日の景状に安んして進取の志を生する能はす歐米諸國は逸馬脱轡の勢を以て奔進することを知らすして老牛一歩一喘の徐歩を以て足れりとすへし內國政治上の安穩は之に因て保持することを得へしと雖とも歐米諸國に後るゝこと日に

益々遠きに至らん僕の私心竊に憂慮に堪へさる所也知らす賢契以て如何と爲すかを

微笑云是レ緊要問題

僕九州諸縣特に薩隅日の形勢を見て大に感ずる所あり合して之を評すれば九州諸縣の民智は遠く中國及び關東諸縣に下ると雖とも特に薩隅日の民智の卑低なる實に驚くに堪へたり然るに王政維新の功業多くは此諸國人の手に成り餘榮延て今日に及び此諸國の人にして朝野顯要の位地を占むる者斗量車載も啻ならず單に鹿兒島縣人の名を聞けば世間既に之を畏敬する者あるに至る其智識の卑低なる此の如くにして其權勢の強大なる彼か如きは抑も何ぞや彼等か今日に享受する所の幸榮は僕其勤王討幕の餘慶なるを知れり此未開不文の人民にして能く天下に率先して維新の大業を成就せるに至ては僕實に其因由を知らさる也後ち熟ら之を思ふに及んで遂に一説を得たり古昔羅馬の文明既に其極に達し驕奢柔弱至らさる所なきや日耳曼森中の蠻族襲ふて之か市都を燒き之か城郭を毀ち備さに強暴を逞ふせり平氏久しく都門富貴の樂に豢養せられて其人皆な風流都雅を極むるや木曾山中の蠻民義仲の如き者起て之を蹂躙し公子王孫首を傖夫に授け麗姫艶妾憐を賤卒に乞ふに至れり今ま徳川氏末路の形勢を案ずるに士人泰平に慣れて耳曾て干戈の音を聞かす柔惰孱弱幾と婦女子に異ならすと雖とも其風流都雅なると亦粗は平氏の末路に髣髴たり西部不文未開の武夫一たび臂を振て忽ち德

君山云古人未發ノ奇說稍ヤ苛酷ナルニ似タリト雖モ證左明確素ヨリ無根ノ妄論ニ非ス

川氏三百年の積威を覆滅せるは蓋し偶然に非ざるなり文明の弊は流れて柔弱と爲り都雅柔弱の極遂に未開不文の民に亡ぼさる僕竊に之を以て勝敗興亡の常勢と爲す是の故に六國文明にして暴秦の爲めに亡ぼされ晉文明にして五胡の蹂躪する所と爲り唐宋文明にして蠻族野民の爲めに苦められ金遼不文にして跋扈を極め胡元不文にして漢土を一統せり其烈士に富めると先明の如きも何ぞ滿州の蠻族と如何ともする能はざりき是れに由て之を觀れば文明都雅の民にして慓悍不文の民に蹂躪せらるゝは古今の常數復た何ぞ薩人の德川氏を亡ぼせるを怪まん其賴む所は唯た慓悍不文なるに在るのみ伏して惟みるに賢契夫れ國の爲めに自愛せよ

九月念三　都の城に於て　武藏

佐久間老兄

副啓嚮きに須磨の浦發の書牘を以て詳說せる少女は之に接する愈々久しふして天質益々俊秀貞亘なるを覺ふ僕歸都の後ち賢契と共に叮嚀之を愛護敎導せは必ず素論を實行するの利器と爲るべし謹具

拈花云冷罵痛快

君山云僕モ亦少シク諸將ノ遺孤ヲ知レリ眞ニ慷慨質直ナル者多シ僕ノ之

第九章　別有幽愁闇恨生　此時無聲復有聲

武藏の鹿兒嶋に入るや心竊に故老に就て順正公の事蹟を問ひ以て維新更始の大業を成就せる所以の源頭を究めんとを期す何ぞ圖らん一藝一能の士も尙は皆な出てゝ朝廷に仕へ全縣一空復た一人の就て往事を問ふへき者なからんとれ古人野に遺賢なきを稱して國家の美事と爲せり之をして薩摩今日の情形を見せしめバ其喜ひ果して如何ぞや武藏自ら之を東京に問れすして鹿兒嶋に問れんと欲せるの迂愚を笑ひ日に四方と跋渉して諸公か政跡の尙ほ今日に存する者を探る一夕西南の役に死せる賊將の遺孤數名短袂を連ねて來訪し切齒扼腕時事を縱談す武藏大に諸壯士の慷慨質直なるを喜ひ直ちに心胸を吐露して毫も隱

二屬望スル實ニ淺鮮ナラサル也

拈花云月色朦朧煙霧蒼茫楓葉荻花瑟々聲アルニ方リ多恨ノ遊子僧俊寛ノ曲ヲ聞ク豈ニ感想ニ堪ユ可ンヤ

忌する所なし諸壯士も亦武藏は温厚にして博く大局に通するを喜ひ痛論極罵深更に徹して始て辭し去る時に月色朦朧煙霧蒼茫恰も春夜の如くにして而して楓葉荻花瑟々聲あり武藏欄に倚て危坐し仰て天を望み俯して地と眺め恰も感愴に堪へさる者の如し偶ま隣樓亦武藏と感を同ふする者あり初めは明月の詩を誦し尋て窈窕の章を諷ひ遂に琵琶と撥して僧俊寛流謫の事を歌ふ輕攏慢撚嘈々切々人をして坐ろに悲涙潸然たらしむ萩江大に感し武藏に問ふて曰く「奏する所は是れ何の曲ぞ」と

武藏曰く「是れ平家物語中の一節なり卿若し悲愴の因由を知らんと欲せば此一文を讀め」と ⊖

乃ち立て床頭の平家物語一卷を取り之を萩江に與へて曰

く「是れ俊寛僧都の女某が有王に托して父の硫黄島に在るに寄せたるの書なり此時女の歳僅に十二未た文字に嫻はすと雖とも字句悽愴、情意纒綿、人をして終讀に堪へざらしむ之を聞く天下の文章は直ちに眞情を披陳せる者より善きはなしと、眞なる哉言や、古今好尺牘多しと雖とも豈に復た一の之が右に出る者あらんや」と

少女に教へて之を三復せしむ少女幼にして無頼の家に養はれ一双の麗眼素と文字に乏しと雖とも天質敏慧にして強記且つ常に好んて新聞紙を讀み粗は簡易の文章に通す故を以て忽ち此尺牘の讀法を得て之と暗誦するに至れり武藏大に喜ひ更に少女に語て曰く「昔し平氏の俊寛を硫黄嶋に流すに方てや威權赫々飛鳥も之か爲めに其翼を

君山云滿腹ノ經綸事ニ觸レハ輙チ發ス武藏ノ性行何ソ吾カ學堂兄ニ肖タルノ酷タシキヤ

收む唯た不義の富貴と風前の燈火に異ならず頼政一皷して覆滅の端緒を開き義仲再皷して其暴威を奪剥し頼朝三皷して遂に之を西海の波底に葬れり民心に背て權勢を維持するの難きと以て證すへきのみ今や執權者皆公正無私にして善く國家の利害を以て其心と爲すと雖とも政權の二三地方人士の手に歸せると既に久しからずと云ふ可らず情弊百出當局者尚ほ洗掃の罰に苦むも亦宜なる哉今にして早く藩閥政治の弊患を根治せされば民心必ず離散して遂に收拾す可らさるに至るの憂ある也是を以て朝貴苟も一朝の富貴に惑はずして身後百年の名を惜まば既に公正なるの處措は益々之を公正にし未た除かさるの私情は力めて之を除かさる可らず若

微笑云才識履歴既往將來ノ四者ハ在朝在野兩黨勝敗ノ因テ判ルヽ所ナリ讀者輕々ニ看過ス可ラス
若花云松村氏ハ果シテ是レ故小野氏深沈財務ニ明カナルノ一語以テ之タ證スヘシ
君山云是レ僕カ矢野氏ト云フ所以也

し至公至正の議院制度を施設して勝敗を輿論の法廷に爭はゞ擧て民間諸黨の人物と破らんと決して難きに非さる也
抑も俗眼の貴む所は才識に在らずして履歴に在り民間今ま人物に乏しからずと雖とも多くは皆な勳功を將來に奏すへきの人にして之を既往に奏せるの人に非ず其履歴未た以て凡俗の敬重信任を買ふに足らさる也松村氏の深沈にして財務に明かなるは以て大藏大臣たるへく竹野氏の敏慧にして交際に巧みなるは以て全權公使たるべく菊川氏の精悍にして法律に通するは以て司法大臣たるに足り梅山氏の寡默にして溫厚篤實なるは以て宮內大臣たるに適せり此他遠岡氏の博學多才なるか如

拈花云試ニ其他ヲ推測セン二竹野氏ハ島田三郎氏菊川氏ハ沼間守一氏梅山氏ハ田口卯吉氏乎

君山云夫レ或ハ然ラン然レ𪜈著者ガ更ニ其性行ヲ細寫スルヲ待タスシテ玆ニ之ヲ推量スルハ寧ロ太早計ニ非スヤ縱ヘ中ルモ偶中ノミ

き櫻江氏の雄辯多能なるか如き桃井氏の公正無私なるか如きは皆な是れ得易からさるの人物にして之を内閣員と爲すも決して其職任を辱かしむるの患なき也然りと雖とも俗眼恐くは其履歴を見て其才識を見す國政を此諸君に委ぬるを以て無上の危險と爲さん乎在朝の政治家何ぞ民間の人物を畏れん才識は以て履歴に勝つ能はす朝貴若し正々堂々れ陣を張て政權を爭はゞ在野黨に勝んこと必然の勢なり余は朝貴の爲めに之と賀すと雖とも國家の爲めに人民の頑愚なるを吊せさるを得す」と

時に大西三郎口を掩ふて竊に欠伸す武藏一笑謝して曰く「平氏厭屈の情形を思ふて覺へす時事に及ひ長談頗る卿等の疲倦を招けり然れとも余か滿腔唯た政治有て他物

微笑云小姐果シテ武藏ノ鑒識ニ背カス

君山云本邦何ノ日カ這般ノ婦人ヲ見ルヿヲ得ン一讀一慨

なし故に婦女子と會はるも尙は政治を談す是れ三郎氏の熟知する所と雖とも萩江小姐に在ては余か奇癖に驚けるなるへし」と

語未た終らさるに萩江臉邊淡紅を潮し手をつき頭を垂れて曰く「妾山野無學の賤婢と雖とも既に日夕主君に侍するの榮と辱ふす主君好む所の事を學んて聊か政治上の事態を解するに至るは妾が畢生の願なり主君の談論は延て明旦に徹するも妾唯た授かる所は尙は少なきを覺ゆるのみ何そ倦厭眠を催すか如きことあらんや」と

武藏頗る萩江か心を用ゆるの尋常ならさるに感し更に之に告て曰く「歐米の貴女皆な政治を知らさるはなし其甚たしきに至ては貴夫人にして能く内閣の政略を動かし

君山云何等ノ才思何等ノ文情武蔵之ヲ以テ古今無双ト

内閣の進退勝敗を決する者あり卿の如きは欧米貴女の資質を備へて毫も東洋婦女子の妖柔卑屈なるに似ず余窃に卿か欧米に生れずして日本に生れたるを惜むなり然りと雖とも女丈夫若し出てずんば我が婦女子の陋習を如何せん卿の前言若し違はずんば卿夫れ欧米貴女の言行を学んで我の婦女子妖柔卑屈の陋態を一洗するに勉むべし余請ふ労費を吝まず卿をして此重任を遂けしむるの計を運ふさん」と

秋江赧然として唯た其拙劣不能を謝す

㊀其後ち便りなき「孤子と為りて御「向後をも承る便もなし身の有様をも知らせ参らせず、いぶせさの積れる此世の中のきくらして晴るゝ心地もなく侍り、偖ても三人同谷

為ス称揚稍ヤ過クルカ如シト雖トモ亦無稽ノ言ニ非ス

とて、一つ嶋に移されたるに、二人は免さるゝに、何どや御身一人残り留まり給ふらんと、人知れず嘆く、唯思召やらせ給へ、人々島へ流され給ふて後ち其ゆかりの者を尋ね求めて手足を損して責め問ふべしなど聞へ侍りしかば召使ひし者共も遠き国々へ落ち失せて旧里に一人も留まらされば、都には草のゆかりも、枯れはてゝ、立ち紛るべき方もなく哀き最と惜しと事問ふ人もなし、君達も召捕れるべきなど聞へしかば母御前、弟、我身三人引具して幽かなる便りに付て鞍馬の奥とかやに迷ひ入りて日影も見へぬ山里に住みも習はぬ柴の庵に忍び居て候ひし程に朝夕は御事をのみ嘆き給ひしに打副へ身々の向後如何にせんと際なき御物思ひの積りにや病と成らせ給ひ

りしかば弟と二人兎角労はり慰め参らせしか共叶はずして空しく見成らせ参らせぬ生きての別れ死しての別れせん方なければ、二人歎き暮らし、泣き明かし侍りし程に、又弟も疱瘡とかや申す労きを為し、今年の五月に身まかり侍りき、同し道にと歎きしか共、はかなき露の命と云ひ乍ら、消へもやらで強面(つれ)なく、今までは草の庵に、残り留て侍れば憂き事も悲き事も思召し知るべし、拙なき果報の程こそ、宿世の身の務め、辱なく思ひ侍れ、故母御前御労きの時、我れ死なば、誰をか便りと憑みをはすへき、奈良の里に姨母と云ふ人をとまず、尋ね行きて打ち嘆かは、去り共憐れみ給はんずらんと、仰せ候ひしを承り置て、當時は奈良の姨母御前の御許に侍り、疎なるへき事には有らね共

幽かなる住居推し量り給へ、偖ても此三年まで如何に御心強く、有り共、無き共、承はらざらん、母御前にも、弟にも、後れて憑み方なし、誰に預け如何にせよとの思召にか、疾くして御上り候へ、戀し共戀し、床し共床し、三年の思ひ歎き氷茎に盡し難く侍れは、留め候ひぬ、穴賢々々、

第十章

吾拾吾書歸十簽
心謂美人手所觸

李下の冠、瓜田の靴、古人の戒言吾と欺かさる也武藏高遠の志を懐き日夜國家を思ふて憂心燃ゆるか如し固より酒色に沈溺せる者に非すと雖とも既に紅顔の美少年を以て窈窕たる佳人を伴ふ惡評の世間に流傳するは固より當然の數なるのみ武藏一日家書に接す忙手之を披見すれは初めは起居の健全を説き終りは則ち微辭を以て少女を伴ふの故を詰る武藏一讀大息して思へらく「余不肖と雖とも豈に荻江の色に溺れて之を醉漢狂婦の毒手より援ふ者ならんや當時の情狀は細密以て之を家君に報せり家君余か從來の言行を信せす女色に耽湎して素志を失ふ者と爲せし乎何そ夫れ冤なるや」と

拈花云慈心忍チ其過ヲ悟テ罪ヲ謝ス眞箇好漢

微笑云世間眞ニ這樣ノ好色漢アリ

怨色少しく面に上る既にして悔悟する所あり東向拜謝して曰く「小子過てり小子過てり少年の色に溺るゝは世間の常事なり子を知る父に如くはなしと云ふと雖とも慈父を以て愛子を視る焉ろ萬一を慮て戒責の語なきを得んや慈父をして此憂慮あらしむれ實に小子の大罪なり」と

時に鹿兒島城中武藏が佳人を伴ふとを說く者漸く多く間ま之を以て無志無操の輕薄少年と爲す者あり

月明に乘して琵琶を彈せるの客は東都の貴公子なり其辯以て俗耳を寧ふに足り其勇以て怯夫を畏れしむるに足り兼ねて少しく漢洋の學に通すと雖も稟性薄倖にして酒色の他に天下復た人生の大樂あるを知らす逆旅の主人唯た

微笑云世間眞ニ這樣ノ貪婪漢アリ

其貴公子たるの故を以て諂諛迎合至らさる所なく遂に勸むるに美人を以てす其言に曰く「聞くか如くんは騎樓の客も亦東都の人なり少しく才學ありと雖とも素と是れ商家の子のみ然るに佳人を携へて千里に遨遊す何そ其分を知らさるの甚たしきや今ま殿下の如きは食前方丈侍妃數百の中を擇ひ一妃を隨へて此僻陬に降臨す何ろ夫れ謹嚴なるや苟も國家の重を以て自ら任する者皆な此の如くならさる可らさる乎」と

是より讒舌以て佞辯を逞ふ頻しりに秋野武藏が侍妾（貴公子寓する所の亭主人萩江を稱して侍妾と云ふ）の艶麗を說き公子をして欽羨止む能はさらしめ以て之を色界に沈溺して己を私ふに斡旋の利を網みせんと謀る

公子固と酒色の樂あるを知て其他を知らず故に至る所假紅倚紫の逸樂を恣にし廓滸に入るの夜よりして既に纔に青樓に遊ふと雖とも逆旅の主人未た之を知らさるなり是を其辭を婉曲にして隱に之を誘へる所以なる乎嗚呼亦迂なり

公子既に廓城の明眸皓齒に乏しきを嘆し將に去て之を他方に求めんとするに方り逆旅主人の簧舌以て隣樓舍宿の佳麗を説くを聞く之を如何ぞ肉飛ひ骨動かさるを得んや乃ち言を設けて秋野武藏を隣樓に訪ひ甘言以て其歡心を買はんとを勉む武藏一晤して輕薄公子の人と爲りを賤むと雖とも彼れ則ち堂々たる貴顯公子にして我は則ち一商家の子たり貴人の訪問を受けて返訪せさるは禮に非さる也故を以て翌早直ちに返訪の禮を修む貴公子大に喜ひ是より日夕武藏を訪ふて快辯刻を移すと雖も其意素より萩江に在て武藏に在らす談論風生の間秋波數々佳人に注く萩江天資靈慧と雖とも其性素と淡泊瀟洒にして且つ世故に慣れす今ま貴公子の親交を求むるに遇て其他意あるを知らす唯た辯舌爽快にして談話の奇警なるを喜ふなり貴公子乃ち萩江を以て己を悦ふ者と爲し微辭以て其意を探る萩江唯た公子の厚情に感して毫も其他を悟らす言語少しく男女の眞情に涉れは則ち恬として解せさる者の如し公子の書を以て之を挑むに及ひ萩江始めて其異意を悟り大に驚て之を返へす公子怒て曰く「賤婢無禮敢て西蠻翁主と以て自ら居る乎余豈に卿直たる能はさらんや」と ㊀

枯花云小姐眞ニ愛スヘク又憐ムヘシ

微笑云公子ノ暴虐眞ニ師直ニ類ス知ラス今日現ニ這様ノ貴公子アル乎

然れとも倘ほ意を栽江に絶つ能はす更に一絢を贈り附するに古歌を以てす歌に曰く「返へすさへ手や觸れけんと想ふにぞ我が翰なからうちも置かれず」(三)栽江見て益々驚き直ちに艶書を返へし後ち復た公子を見ず公子も亦益々怒て罪を武藏に歸し一夜之を道に要して暗撃す偶ま遊子數名兵子之歌を吟して來るなり公子驚て逃れ去る武藏一棒と肩邊に與すと雖とも帽を棄てゝ家に歸ることを欲せす遊子過るの後を待て之を遭難の所に探り塵を掃ひ頭に戴て悠然客舍に歸る未た要撃者の何人たるを知らす亦之を婢僕に告けさるなり翌朝晏起食に就く栽江一笑問ふて曰く「昨夜何れの所にか隣樓の公子と會せる」と

微笑云是レ酒紅ニ非ス怒色ノミ

武藏曰く「何ぞ問ふとの奇なるや余の公子を見さると既に數日或は恐る公子病に臥して外に出る能はさるを」と栽江曰く「主君幸に妾を瞞する勿れ主君固と飲食の友を喜ひすと雖も昨夕は隣樓の輕薄公子に誘はれて酒樓に登り公子に強られて過飲せると必せり然らすんは酒紅は決して面に上らす二君謀て其帽を換へさるなり」と武藏栽江の壁間を指すを見首を回ふして其帽を顧れは何ぞ圖らん昨夜被り來れる者は隣樓公子の帽にして我か帽に非さらんとは是に於て急に朝食を終り帽を提て公子を訪ふ公子武藏來訪の一語を聞て胸頭に悸すと雖とも之を見されは益々其疑を加へんことを恐れ直ちに其室に導かしむ武藏先つ寒暄を演へ而る后ち背後の帽を乘り之を公子

君山云武藏ハ篤厚公子ハ輕暴對說反覦語簡ニシテ意ハ則チ長シ

の膝邊に置て曰く「僕昨夕之を某所に拾へり想ふに公子の誤て遺せる者乎今ま謹て之を還贈す」と公子面に慚色あり口に一語なし武藏即ち公子か自ら輕んじて其言行を愼まさるの不可を說き忠告頗る懇切を極む」後ち數日を經て歴城日報に東都來遊の某貴顯公子、秋野武藏が婢菽江を挑んて應諾を得す怒て武藏を某所に暗擊したることを詳記し以て大に公子を嘲る公子一見して罪を武藏に歸し慚憤措く能はす遂に贈るに決鬪狀を以てす

㈠西臺翁主は後醍醐帝が鹽冶高貞に賜へる所の美人也翁氏の宰高師直舊宮嫗侍從なる者の翁主の美を說くを聞て眷戀止む能はす嫗を介して數々之を挑む翁主の莊辭以て之を拒斥するや師直大に怒て諸を鹽氏に讒す高貞止むを得すして叛き竊に亡けて出雲に還り其親信をして妻子を護し間道以て之に從はしむ追兵之に及ふ其人翁主を殺し身之に殉して以て死す師直益々怒り遂に高貞を窮討して諸を殲す時に曆應二年四月なり

㈡貴公子の菽江に贈れる古歌は則ち師直翁主を挑むに方り公義をして作らしめたる所の者なり物茂卿曾て之を七絕に譯して曰く「我思美人貽之書美人弗讀棄庭除吾拾吾書歸十襲心謂美人手所觸」と古今漢詩を和歌に譯し和歌を漢詩に譯せる者多し未た此の如く妥當典雅なる者はあらすと云ふ

君山云單刀直入論斷痛快

第十一章　此身未識為誰用　慷慨長歌看寶刀

抑も決闘なる者は蒙昧世界の遺物にして蠻野未開人の弊習也封建割據の世に在ては本邦亦數々士人の決闘を見たりと雖とも其因て起る所を尋ぬれば概ね皆な武藝の優劣を爭て生命を一躍一撃の間に賭するに外あらざ故に日本の決闘は武人、劍客、博者の事にして他種族の人多くは之に與からず歐米諸國の決闘に至ては則ち然らず其起源既に全く本邦の者と異にして其性質亦全く我に同しからざる也若夫れ方今歐米二州特に佛曼諸國に行はるゝ所の決闘なる者は法律以外に人其名譽を護るの具にして裁判上の（ジュヂシアル）決闘（コムバット）は轉化したる者也往古文運未た開けず世態尚ほ蒙昧なるに方ては爭訟起るも原被兩造を審問して是非曲直を

判ずるとを知らず手を熱湯に浸さしめ其糜爛せざるを直とし其糜爛せるを曲としたるとあり手に熱鐵を握らしめて正邪を定めざるとあり劍戟以て兩造を爭鬪せし先勝者を直とし敗者を曲としざるとあり是れ皆な直者は必ず鬼神の祐護を受け縱令水火を蹈むも決して傷死の患なしと迷信せるに起れる者なり

爾后文明化育漸く洽ねきに及び陋習漸く掃攘せられて復た裁判に決鬪を用ゆる者なしと雖とも裁判上の決鬪は一變して現行の決鬪法と爲り人若し他人の爲めに其名譽を傷けられたりとするときは直ちに友を介して書を贈り以て決鬪を挑むの奇習あるに至れり小人輩々の不平に堪る能はずして貴重の生命を一躍一擊の間に賭それば其汚

拓花云夫レ然リ豈ニ夫レ然ランヤ

辱何か故に雪くとを得へき乎其名譽何か故に全きとと得へき乎謂はれなきの甚しき者也特に近時專ら日耳曼聯邦に行はるゝ所の決鬪に至ては概ね短銃を以てせずして長劍を以てし鬪者の間に踰ゆ可らざるの距離を畫し傍師の之に臨視するあり朋友故舊の之を監檢するあり規制嚴然寸毫も之を犯すとを得ず故に敵人の爲めに勝を制せらるゝも僅に微傷を受るのみ嘗て其生命を危ふするか如きとあきも也ビスマークの大學に在るや一年半の短きに二十八回の決鬪を爲せるも唯た一たび面上に微傷を被むれるに過きず其所謂る決鬪なる者は直ちに是れ小兒の遊戲儀式上の虛形なると以て証すべき也裁判上の決鬪は蠻民の迷想に起因し儀式上の決鬪豈に文明人士の事業ならんや

此の如き兒戲を以て名譽を獲るの好計と爲し以て蠻世殺伐の遺風を存す恐も亦甚たしと云ふへし決鬪にして若し汚辱を雪き名譽を全ふするを得ば沸湯に入り熱鐵を握るも亦以て此大結果を收むるを得べし世の決鬪を主張する者何ぞ亦熱鐵を握て正邪を判つの蠻習を十九世紀の今日に興復せざる

拈花云冷語下シ得テ妙

秋野武藏書を得て歎して曰く「公子輕急余が寛恕を德とせず却て余を殺しく甘心せんと欲す何ぞ狂暴の甚たしきや且つ公子幽蒙にして未た決鬪の制式を知らず人を介せずして直ちに挑書を贈る豈に誤らずや夫れ決鬪ある者は歐米識者の厭惡唾棄する所の陋習にして英國の如きは今を去る四十有餘年前既に決鬪廢止協會ある者

を設て盛に排斥の方計を講し遂に大に之を衰退せしむるに至れり然りと雖とも決鬪も亦多少の利益なきに非ず國民壯武の氣象を養成する則ち是れ也特に本邦今日の如く柔惰風を爲し文弱習を爲すの時に在ても蠻世の遺習たる決鬪の如きも亦病を治するの一藥乎且つ公子の拙劣無法なるや深夜余を途上に要して私憤を漏さんとするに至れり今ま若し余か此蠻習を服膺するの故をを以て挑書を拒絶せは渠れ必す益々慚憤して余を暗撃すべし是れ余自ら怯名を取て亦渠れに與ふるに卑劣の譏を以てし且つ之をして罪を國法に得せしむるの道也如かず渠か挑みに應して彼我の名譽を全ふせんには」と

拈花云余モ亦武藏ト同見

君山云武藏ノ苦衷想フヘシ

乃ち答翰を公子に贈れり其文に曰く「僕平生泰西決鬪の

微笑云小姐素ヨリ

習俗を以て蠻野の遺風と爲す故に終身之を人に挑まさるへしと雖とも既に公子の挑書を辱ふす之を拒むは貴人を厚待する所以に非さるに似たり故に勉强諾て高誘に應じ抑も執て以て鬪ふへき兵器を定むるは被挑者の職任にして挑者の職任に非す是れ泰西決鬪法の常制なり然りと雖も本邦に決鬪する者は未た必すしも泰西の法に從ふことを要せす公子幸に劍銃二器の中に就て其選む所を定めよ僕當に高命に從て準備する所あるべしと遂に某夜深更人定まるの後を待て洲崎の野に會し短銃一發。以て死生を決せんことを約す

婢萩江探知して大に驚き禍根皆な己れに在るを以て憂悶措く能はず叩頭百謝して當夜男裝を着け代て公子の彈丸

坐視スルヿヲ得ス

微笑云二人頭ヲ聚メテ密竊スルノ狀想フヘシ

を受て死なんことを請ふ武藏温言以て之を諭し且つ固く他人に漏泄することを禁す萩江益々憂悶して幾と寢食を廢し數々之を僕大西三郎に計ると雖とも三郎亦計の出つべき所を知らす沈思多時僅に電報を發して東都の老主人に告け以て嚴令を請ふの一計を案出せるのみ武藏は孝子也苟も父命する所あれは小心翼々必す之を遵守すること常とせり萩江日夕武藏に侍して其人と爲りを熟知す故に大に此計を稱贊し三郎を敬愛するの意始て動く二人直ちに此計を行はんと欲すと雖も武藏嚴然として旅館の樓上に正坐し常に婢僕の擧止に注目して一歩も外に出ることを許さす是に於て二人計を得て更に計を行ふの計なきに窮し其憂悶益々深し夜深人靜まるの後を待ち竊に脱して電報館

微笑云二人ノ窘窮想フヘシ

に走らん乎深夜私報を傳へざるを如何せん亭の主人に托せん乎事の外に漏るゝを如何せん

既にして決鬪の日既に近く翌夕に迫る發電一刻を躊躇すれハ回電期に後るヿの思あり然り而して武藏儼然机に倚て家書を草し深更に至るも尚は寢ねず且つ婢僕をして須臾も其傍を去らざらしむ二人愈々窮し相ひ顧みて大息するのみ後ち數刻萩江武藏の熟睡を窺ひ竊に寢床を出てヿ三郎を覺ましぬ三郎も亦憂心冲々計を行ふの計を求めて空しく腦漿を勞す今ま萩江の來るを見て突然蹶起し直ちに進んて「好計ありや」と問ふ

萩江曰く　「妾固より好計なし故に來て之を足下に求むるのみ唯た時期既に切迫して一刻を猶ふし難し止むな

微笑云小姐却テ決断アリ三郎ノ因循断ナキハ何ソヤ

くんハ茲に一拙計あり主君の憤怒を顧慮せず足下明朝隙を窺て電報館に走り危急を老主人に報ずる是れ也」と

大西曰く「主君若し僕か不在を悟て詰責せば將に之を如何せんとする乎」と

萩江曰く『妾唯た答へて云ふべし「今夕の事ハ一生の大事なり若之を豫め老主君に報せず異變起るに及んて始て之を報せば其憤怒を激らんと必せり妾か如きハ云ふに足らず三郎氏に至てハ特に老主君の撰抜を以て主君に侍す然るに既に諫めて決鬪を止むる能ハず亦豫め之を東都に報せず而して萬一の變あらば復た何の顏色有て老君と見るを得んや故に主君の嚴命に背き隙を窺て電報館に走り今夕の事を東都の老君に報せり妾も亦傍より

之と從逐せり」と而して二人叩頭して其罪を請ふべし」と

大西曰く「奇絶妙絶、大事既に目前に迫る何ぞ主君の詰責を顧るに遑あらんや」と

萩江曰く「他に好計を得ずんば足下請ふ必ず此拙計を行へ東都の老主君報を得て大に驚き直ちに決闘を止むるの返電を送らば主君必ず命に逆ふことを敢てせざるべく主君の生命之に因て全きことを得べし」と

三郎頗る萩江の智にして且つ勇あるに感し其策に從て明朝電報を發するに決し乃ち夜を徹して幾たびか電文を添削修正し翌朝電報館開館の時期を待ち武藏厠に上るの際に乘して直ちに階子を飛下し一高一低二雙の木履を半蹴して穿ち去る

拈花云是レ薬ヨリ

第十二章 一寸心金石摩ニ若鐵一 一節氷霜倚ニ碧天一

武藏曰く「三郎安くに在る」と

萩江叩頭して告ぐるに實を以てす

武藏曰く「三郎行くこと既に遠き乎」と

萩江拜謝して答ふるに既に歸途に在るべきを以てす

武藏默して言なく三郎の歸るを待ち徐ろに婢僕に謂て曰く「卿等事を解せず徒らに家君の憂慮を勞せり今夕の事は電文の能く情曲を通ずる所に非ず故を以て余既に事由を細書し郵信に托して之を家君に報し以て罪を請へり然るに卿等余が苦心の在る所を察せず恣に電音を發して空しく家君の憂慮を招き以て余が不孝の罪を増加せり家君若し事の由來を知る能はず直ちに返電して今

婢僕ノ希圖スル所ナリ

君山云人ヲシテ胸悸止ム能ハサラシム作者何ソ巧ヲ弄スルノ甚タシキヤ

夕の會合を禁遏せれ余が進退維れ谷まるに非ずや」と

婢僕唯た叩頭して罪を請ふのみ既にして落陽山陰に入り時器過午七時を報ば婢僕頸を延て返電を待つと雖とも返電未た到らさる也既にして時器十時を報すと雖とも返電尚は未た到らさる也菽江焦燥に堪へす数々三郎を目す三郎漸く悟り突然起て階子を飛下し徒跣電報館に走て返信の到否を問ふ返電尚は未た到らさる也武藏は返電の瞬時も晩からんことを祈て一刻三秋の思ひを爲し婢僕は返電の瞬時も早からんことを祈て隙駒走過の迅速なるを怨み柱上の時辰儀意有て故らに長短針の運行を急くか如き思ひを爲せり既にして時器既に十二時を報す返電尚は未た到らさる也時に武藏僕三郎を促かし決闘場に臨むの準備を爲さ

君山云是レ小波瀾

しむ三郎憤々として且つ電報館員の遲鈍を罵り且つ主命を奉行する時に叩門の音樓上に徹す菽江雀躍して階子を下れば恰も好し配夫の電報を齎らせる也菽江之を配夫の手中より奪ひ倉皇武藏に捧くれば何ぞ圖らん是れ東都莫逆の友佐久間勇が歸期を促かすの電報ならんとは菽江已に倉皇階子を下り遠く呼んて電報の一箇に止まるや否やを問ふ配夫笑て曰く「我か齎らす所固より二通卿唯た其一通を奪ひ去れり何そ狼狽の甚たしきや」と

菽江其輕忽を謝し他電を接收するに正に是れ東都老主君の寄する所也菽江喜んて手の舞ひ足の踏む所を知らす直ちに樓上に走て之を武藏に傳ふ武藏憂色を帯ひて披見す電文に曰く「決闘の事專に意外に出つ然れとも汝の之を

君山云是レ大波瀾

微笑云小姐ノ失望落膽想フヘキナリ

又云霹靂一聲チ翻ヘシ地ヲ覆ヘス是レ果シテ何人ゾ

君山云是レ亦大波瀾

約する必す深故あらん止むなくんバ深く死生を決して毫も卑怯の挙動あると勿れと

武藏大に喜んて幾くたひか慈恩を謝し直ちに三郎を提けて出つ婢僕相ひ顧みて愕然たり

主僕既に行て洲崎に到り待つと須臾にして公子も亦一友を携へて来り會す乃ち相ひ去る三十歩三郎と公子の友とをして一、二、三と呼れしめ第三聲を期して両人同時に發射するに決し友と三郎と既に一、二、を呼ひ將に三聲を放たんとする時俄然人あり大喝一聲忽ち公子を撃倒す其友大に驚き高く呼んて援を求む主僕も亦大に驚き直ちに走て公子を扶け起し三人之を擔ふて其旅館に至り傷所を撿するな恰も棍棒を以て毆打せる者の如く輕ふして患ふるに足

君山云一層ハ一層ヨリ危急

微笑云前ノ大喝一聲公子ヲ撃倒シタル者ハ是レ萩江小姐ナル耶

らす三人公子の枕頭に坐し首を聚めて暗撃者を探ると雖とも復た一人の心頭に上る者なく唯た公子と其友との之を以て武藏の使ふ所と猜疑するあるのみ武藏固より公子か猜疑の念あるを看破し乃ち公子若し之を欲せば快復後更に決闘して公子の汚辱を雪かんとを發議す公子憤然として啻た更に決闘を挑めるのみならず亦挑むに二弾連發の決闘を以てす武藏曰く 「諾」

主僕翌早旅館に歸り萩江に語るに昨夕の情况と他日の再約とを以てす萩江煩悶天を仰て歎して曰く 「天道、是耶、非耶、何ぞ妾か苦心をして悉く齟齬せしむるや妾か主君の禍難を救はんと欲して施せる所の者は却て益々之を深大ならしめたり妾實に生て再ひ主君の恩容を拜するの

君山云一語霹靂入耳ヲ聾ス

面目なきなり」と
直ちに机邊の短銃を取て自殺せんとす武藏急に之を奪ひ叱して其所以を語らしむ秋江默して言なく紅涙潸々然たる後ち少時頭を垂れ大息して曰く「昨夜決鬪場に公子を撃倒したるは他人に非ず則ち妾也妾聞く公子平生銃獵を嗜み頗る射撃の術に長すと主君若し短銃を取て之と決鬪せば其撃殺する所と爲らんと必然の勢也妾既に再生の恩を主君に受け却て妾が故を以て主君を死地に陷らしむ賤妾愚なりと雖とも如何ぞ之に忍ひんや故に百方決鬪を妨るの計を求むと雖とも得す僅に電音の一計を三郎氏に得強て之を施すと雖も功なくして却て害を生し主君已に三郎氏を伴ふて決鬪場に赴かる妾是に至

微笑云小姐果シテ武藏ノ鑒識ニ背カス

て計の出る所を知らず倉皇棍棒を提て決鬪場に赴き公子の背に回り全力を注て其頭を撃打せり竊に思へらく公子死すると既に久しと焉ろ圖らん心手相應せす頭腦を打破せす誤く右肩を傷つけんとは是れ尚は可なり之か爲め主君をして止むを得ず更に二彈連發の決鬪を約せしむるに至ては妾が罪實に萬死に當る妾復た何の面目有てか主君に見へん爾時妾が直ちに自首して逮捕に就かざりし所以の者は更に一たび恩顔を拜して死なんと欲せるか爲めのみ」と
説き終て双眼一涙なし悲痛極まる時は涙源乾涸する乎將た天命の非薄を怨み悲痛既に其度を超過して憤怒と爲れる乎主僕一聽一驚驚き終て秋江を慰撫し暫く自首を稍延

微笑云是レ眞情實事

せしむ是き事を公子に告け其意と聞て計と定めんか爲め乎

公子ハ武藏の更に來て昨夕ハ暗撃者を告るを聞き愛情一變しく憎情と爲り直ちに之と法術に訴へ萩江を罪せんと欲いと雖とも之を訴ふれハ則ち私憤を武藏に漏らす能ハさるを恐る故に暫く之を延ハし第二の決闘後を待て事を處せんと欲そ武藏之を可とし諸人と戒めて暫く暗撃ハ事を秘せしむ爾後萩江深く世事の不如意を歎し日夜鬱屈して復た自他の利害安危を顧慮せそ命を天に委ねて唯た武藏ハ指命に是れ從へり

旣にして公子の傷創全く癒へ第二決闘の期亦至る公子ハ今回ハ必す武藏を撃殺して重積せる憤怨を漏らさんと欲

君山云武藏何ソ義俠ナルヤ

君山云公子何ソ鹵莽ナルヤ

し二彈皆な其胸を狙ふて發射そと雖とも一彈ハ高く頭上を飛過し一彈ハ右に外れて武藏の左腕を傷く武藏に至てハ則ち然らず固より公子の人と爲りを賤めるを以て之を殺しく徒ふに人の父母を悲ましむるとを欲せそ二發皆な公子を狙ハそ試に竿頭の提灯に向て發射せり二彈其紋章に的中し相ひ去る僅に寸餘のミ之をして公子を狙撃せしめば公子固より地上の人に非そ其魂魄若し天に歸せん其形骸ハ必そ地下に入りしなるべし

抑も人と決闘して之を狙撃せさるハ之を以て其敵手に非そと爲その爲めにして固より輕侮の徵証也故に泰西の決闘法ハ斯る待遇を受るを以て恥上の恥辱と爲そと雖とも公子素と鹵莽にして之を知ふす却て武藏の提灯を狙撃し

拈花云此章ノ記スル所危極急極人ヲシテ胸悸シ腕顫ハシム余允評ヲ加ヘント欲シ幾タビカ筆ヲ執テ　タビカ之ヲ投セリ曾テ聞ク佳絕ノ風光ニ過ヘハ歌仙爵伯モ其筆ヲ擲ツト今マ余此章ニ過テ腕顫ヒ筆動カサルハ素ヨリ當然ノ理ナルカナ是レ實ニ余カ擲筆文

て己れを狙撃せさりしを喜へり

翌日に至り決闘の報稍や世間に漏れ或ハ公子、武藏を其旅亭に襲へりと云ふ者あり或ハ武藏棍棒を以て公子を暗撃したりと云ふ者あり或ハ二人一女を爭ふて武藏銃創を受けたりと云ふ者あり浮說百端流言紛々然たり官探て粗ぼ其實を得公子と武藏とを逮捕すと雖とも武藏の創傷正に劇なるを以て之を醫院に送り警察官をして監視せしむ武藏の病床より逮捕せらるゝや萩江見く受傷に堪へず頻に逮捕の吏に哀訴歎願する所ありと雖とも一も聽く所なし乃ち斷然意を決し法衙に至て貴公子暗撃の事を自首す其意蓋し謂ふ以て武藏に獄中に伴ふを得へしと嗚呼懲嘻可憐見なる哉

新日本初卷終

明治十九年十一月廿六日版權免許
明治十九年十二月　出版（定價五拾錢）

著者兼出版人　東京府平民　尾崎行雄
神田區駿河臺南甲賀町貳番地

發兌　集成社書店
東京神田區小川町拾番地

仝　博文堂書舗
東京日本橋區久松町十五番地

賣捌所

東京銀座四丁目 博聞社

東京日本橋通三丁目 丸善書店

東京京橋區南傳馬町 叢書閣

東京神田裏神保町 澤屋蘇吉

大坂心齋橋通リ北久寶寺町 三木佐助

大坂備後町四丁 梅原龜七

集成社
博文堂

發兌書目

政界奇觀 **經世偉勳** 洋綴美本 全一冊 石版肖像密畫入 定價九拾五錢ヅヽ

學堂尾崎行雄先生著○大隈重信公、矢野文雄先生序○末廣重恭、藤田茂吉、箕浦勝人、犬養毅、加藤政之助、吉田熹六、森田文藏、井上寛一、諸先生評

天下ノ奇觀ハ英雄豪傑ノ言行ヨリ奇偉壯快ナルハナシ滄海大ナリト雖トモ之ヲ英雄ガ天地ヲ旋轉スルノ偉業ニ比スレハ唯タ其小ナルヲ見ルノミ而シテ近世宇内ノ大豪傑ヲ擧クレハ人皆ナ必ス三指ヲ露相ゴルチァコッフ英相ベコンスフヰールド普相ビスマークニ屈ス普露二相ノ歷閲奇偉壯快ナラサルニ非スト雖トモ皆ナ門地ノ尙ニ倚ラスンハ則チ名士ノ推挽ニ因テ漸次昇登セル者也之ヲ英相ベコンスフヰールドガ猶太同樣ノ賤民ヨリ起リ獨力ヲ以テ相位ヲ取レルニ比スレバ立身出世ノ奇偉壯快ナル固ヨリ日ヲ同フシテ語ル可ラサル者アリ今マ此書ハ微侯ガ卑賤ノ一寒生ヨリ起テ二タビ大宰相ト爲リ歐洲一代ノ名士ヲ叱咤凌駕シテ雄名ヲ天下ニ轟カセル履歷ニ基テ最近五十年間ノ英國内治外交史ヲ敘述セル者ニシテ政治ノ得失、制度ノ沿革ニ至テハ之ヲ敘スルヿ特ニ詳密ナリ故ニ讀者微侯ガ豪壯沈痛ナル言行ト諸英雄ガ智略ヲ鬪ハスノ奇觀トニ眩迷シテ手卷ヲ離ス能ハサルノ際知ラス識ラス制度ノ得失、内治外交政策

ノ秘機、及ヒ歐洲最近五十年間ノ雄壯快活ナル歷史ヲ領得スルヲ得ヘシ時論之ヲ評シテ近世ノ一大奇書ト云ヘルハ蓋シ偶然ナラサルニ似タリ江湖博雅ノ諸君子幸ニ愛顧ヲ賜ヘ

○革命前法朗西二世紀事

中江篤介先生編

洋裝美本完一冊
定價九拾錢

一千七百八十九年法朗西革命ノ一擧タル實ニ千古ノ偉業ニメ自由平等ノ大義燦然トメ其間ニ煥發シ歐洲諸國ノ局面ヲ一變シ政術ヲメ始テ理學高亮ノ旨義ニ合スルヲ得セシメリ然而メ當初國會召集ノ時ヨリ早已ニ上下ノ相軋轢スルヲ致シ人心日ニ益々衝激シ潰決横流ノ極國中到處屍ヲ堆シ血ヲ湛ヘ今ニ至リ人ヲメ懐然タラシム而テ史籍ニ據リ蒐討スルトキハ斯無前ノ禍亂ヲ階セシ所以ノ吉歷々緣由ノ存スルアリテ決テ偶爾ノ事突如ノ爲ニ非ルヲ見ル本書筆ヲ王路易第十五ノ踐祚ニ起シ一千七百八十九年代議士ノ來會ニ訖ハリ其間佛國內外政策ノ得失將相ノ賢否並ニ諸種學士ノ議論等凡ソ革命ヲ釀出セシ所以ノ者ハ羅列メ一目ニ瞭セシメ書中人物ノ性行ノ如キハ撰寫シテ其細ヲ極メ又其尤モ顯著ナル者ニ係リテハ彼土傳ル所ノ眞像ニ據リ銅鐫シテ之ヲ插ミ讀者ヲメ直ニ其人ト一堂ノ上ニ晤話スルカ如クナラシム願フニ世ノ經綸ノ志ヲ懷抱スル諸君一タヒ此書ヲ誦スルトキハ其徒ニ几案上把玩ノ具ニ非スシテ少ク自ラ

發ムル所有ルコトヲ得ン

○國憲汎論

東洋學人小野梓先生著

假裝分本
全三冊

實價各金壹圓

此書ハ博學多才壯年有爲ノ政事家ヲ以テ其名聲ヲ近時ニ轟シタル小野梓先生ノ新著ニシテ明治九年筆ヲ下シテ以來七ケ年ノ久シキヲ繼テ始メテ落成シ通篇四十餘章ノ多キニ至リ廣ク英‖米‖孛‖佛‖諸大家ノ論說ヲ集錄シ遍ク宇內各土ノ憲法ヲ類從シ其得失ヲ斷スルニ先生平生ノ持說ヲ以テシ之ニ插ムニ本邦古今ノ典故ヲ以テヤルモノナレバ其國憲ノ要目ニ於ケル細大論シ盡シテ殆ント漏ス所ナク實ニ新主義東漸以來未曾有ノ大著述ナリ今也國會開設ノ期將サニ近キニアラントス天下ノ志士ニシテ苟モ其意ヲ政治ニ注クモノ宜シク坐右ニ備フ可キ最大良書ナリ

○麻氏財理學全三冊

英國マクレオッド氏原著
日本赤坂龜次郞譯

卷一刻成
以下續刻

定價金三拾錢

此書ハ英國今代ノ大家ヘンリー、ダンニング、マクレオッド氏ノ原著「エコノミックス、フホアー、ビギンナー」即チ財理學初步ヲ譯述セル者ニシテ議論繁雜ニ過キズ又簡單ニ失セス殊ニ譯文ハ專ラ通俗ヲ旨トセルカ故ニ其深切ナルコト恰モ膝ヲ接シテ語ルガ如ク

如シ初學者經濟學ノ何タルヲ知ラント欲スルニハ恐クハ此書ヲ措テ他ニ完全ノモノ多カラサルベシ田口卯吉先生譯述スル所ノ經濟哲學ト云フ者ハ則チ麻氏ノ大財理學ナリ

○經國策　完

石版肖像入　定價金六十錢

後藤象二郎公　内務次官芳川顯正公序
伊國マキアヴェリー氏原著　杉本清胤先生譯

本書ハ有名ナル伊太利國マキァヴェリー氏ノ原著ニシテ在昔伊國ノ佛蘭西、日耳曼、西班牙等諸强國ノ間ニ間マリ　歩艱難ノ時ニ際シ權謀術數ヲ逞フシ戰國縱横ノ策ヲ運ラシ以テ其國ヲ維持經營スルノ方法ヲ説キ在上ノ人ニ指示セシ奇書ニシテ氏ハ古人ノ糟粕ヲ嘗メズ新ニ一機軸ヲ出シテ所謂マキアヴェリー主義ヲ定メ議論縱横立言深刻ナルハ實ニ芳川公ノ序文ニ云ヘル如ク玄ヲ釣リ微ヲ發キ先賢未ダ言フ能ハザル所ノ者放言シ毫モ忌憚ナク眞ニ泰西ノ韓非ト謂モ誣ザルモノニシテ又氏ノ著書多シト雖ドモ其畢生心血ノ注グ所ハ　書ニアリテ今日東洋ニ在ルノ爲政家ハ勿論猶一己人平常酬接ノ際ト雖モ亦是書ヲ讀テ自ラ警ムル處ヲ知ラザル可カラサルハ與ニ後藤公ノ論セラル丶ガ如シ杉本清胤君嘗テ是書ノ世ニ補益スルヿ少カラザルヲ以テ之ヲ譯述セラル今弊社請テ是ヲ世ニ公ニス乞フ大方ノ諸君子幸ニ一覽ヲ賜ランヿヲ

遠藤孝一先生著

○英語尺牘例題　完

定價金參拾錢

THE GENTLEMEN'S MODEL LETTER WRITER

近來英語作文書類ノ梓ニ上ル者日一日ヨリモ多シト雖モ大概ハ歐米出版ノ作文書ヲ其儘ニ飜刻セルモノカ或バ是ニ一通リノ直譯ヲ附セル者ニシテ與ニ我國人十習文ノ軌範トナスニ足ルモノナシ此書ハ嘗テ英國オックスフオルド大學ニ留學スルヿ數年ノ久シキニ至リ其間日々該國知名ノ學士ト來往シ深ク上流社會ノ交際法ニ通曉セラレタル遠藤孝一先生ノ著ニ係リ載スル所ハ居家日常ノ往復文章ニシテ紳士貴女間ニ必用欠クベカラザル者ハ冠婚葬祭ノ挨拶狀讌宴夜會ノ案内狀ヨリ商賣取引ノ諸文例ニ至ル迄悉皆網羅シテ遺ス所ナシ殊ニ章中ニハ多ク日本ノ地名事項ヲ挿ミタル等万事學者堂ニ昇ル便ヲ圖レリ今ヤ内地雜居ノ實行近キニアラントスルノ秋ニ際シ最モ必要ノ豫備ハ何ナリヤト問ハヾ蓋シ英語英文ヲ修ムルヨリ急ナルハナカルベシ而シテ英語ヲ修ムルニハ則チ他書ノ完備ナル者アラン英文ニ至テハ恐クハ此書ニ比肩スベキ者鮮ナカルベシ江湖英學ニ熱心ノ諸君子乞フ一本ヲ購覽シテ其實用ヲ試ミ玉ハンコトヲ

法學士山田喜之助先生譯註

○麟氏英國會社法

洋裝美本　全一册　定價金壹圓參拾錢

右ハ法律ノ學ヲ實際ニ應用セント欲シ積年ノ苦ヲ大學ニ積ミ才學ヲ以テ其名ヲ法學士中ニ得タル山田先生ノ譯本ニ係リ實ニ法學博士リントレー氏ノ組合法及ヒ會社法ヲ基トシ他ノ要書ヲ纂譯補註セシモノナレハ組合法會社法ノ精粹ヲ集メタルモノト謂フヘク其ノ法學ニ切ナル多辨ヲ要セサルモノナリ

中江篤介先生著

○理學鉤玄

洋裝美本 全一冊　定價金壹圓

泰西哲學ノ今日ニ必要ナルヿハ復タ論辯スル事ヲ須ス然ルニ哲學ノ物タル流派極メテ多ク或ハ神德ヲ頌揚スルアリ或ハ神ヲ以テ有ルヿ無シト爲スアリ其他諸說相容レス是ヲ以テ單ニ一派ヲ講習スル時ハ終ニ掛漏ヲ免カレス本書ハ諸派ヲ網羅シテ遺スヿナク所謂簡ニシテ且ツ盡ス者ナリ江湖ノ君子一讀シテ是言ノ濫ナラサルヲ知ラン

三州長英先生題字長春園廣瀬貞恒先生遺著

○小說箒木

全五冊　一冊ニ付改正定價金參拾錢　第三冊出版

此書ハ文政年間豐後日田郡ニ於テ咸宜園ナル一大義塾ヲ開キ廣ク諸生ヲ敎授シテ博學ノ聞ヘ高ク最モ詩ノ道ニ精シク門下常ニ俊英ノ士ニ饒ナルヲ以テ雷名ヲ天下ニ轟シタル廣瀬淡窓先生ノ父君長春園先生カ深ク時勢ニ慨スル所アリテ起草シタルモノニ係リ事實ヲ天正年間ノ一奇談ニ藉テ數十年來物ニ觸レ事ニ感シ先生ノ腦裏ニ蓄積シタル萬般ノ事或ハ不平ニ堪ヘザル者或ハ歡喜ヲ極メタル者ヲ英雄豪傑才子佳人ノ言行中ニ顯出シタル者ニシテ其趣向ハ和ヲ出テ漢ニ入リ更ニ頗ル西洋ノ小說ニ似タル所アリ實ニ我日本ニ存テハ古來今往稀ニ見ル所ノ珍書ナリ幾ニ第一冊第二冊ハ刷行シテ大ニ世ニ行レタリト雖モ版元ノ書肆他事ニ耽テ其業ヲ果サズ今般弊社ニ於テ其原稿幷ニ在本ヲ讓受ケ茲ニ第三冊ヲ出版スル事ヲ得タリ第四冊第五冊モ續テ開版シ兩三月ヲ期シテ必ラス大成ノ功ヲ奏スベシ續々御購求アランヿヲ乞フ

內外諸名士論評●米國財政學士　同　社會學士東海散士著

○佳人之奇遇

石版密畫入 最上等美本　初篇二篇二冊宛正價五十二錢宛郵税十六錢宛　三篇ノ上一冊正價二十八錢郵税十錢　三篇之下壹冊十一月十五日賣出シ

甚矣哉東洋文學ノ衰ヘタルヤ新書ノ刊行日ニ夥シ然レモ別ニ一機軸ヲ出シテ一家ノ言ヲ爲ス者ナシ眞ニ嘆スベキナリ茲ニ一奇士東海散士ナル士人アリ曾テ東洋美人歎ト題セル奇文ヲ草シ大ニ江湖ニ才名ヲ博シ其後笈ヲ負テ多年海外ニ遊學シ五洲ノ志士ニ交リ萬國ノ形勢ヲ周覽シ學フ所博ク感スル所深ク慨然此書ヲ著サレタリ此書述ルハ亡國ノ忠臣勝國ノ殘孽一離一合一散一聚端ヲ米國革命ノ時獨立ノ檄文ヲ布告セシ獨立閣上ニ佳人ト奇遇セシニ發シ西班牙ニ幽蘭女史アリ裙釵妙齡正統王室ノ恢復ヲ謀リ愛蘭ニ紅蓮女史アリ慨然一國ノ獨立ヲ計リ清ニ范卿アリ明朝ヲ恢復メ亞細

亜三分ノ計ヲナスアリ日東ニ散士アリ満腔凡テ憂國ノ熱血東洋ノ衰頽ヲ挽回セントシ後篇ニ到リ朝鮮ノ名士回天ノ志成ナラス他邦ニ流離スルカ如キ四海ノ志士勇俠相結テ歐人ノ專横ヲ摧カントスル如キ或ハ西都ニ金城ヲ越ヘ或ハ地中海ニ颶風ニ遇ヒ船覆リ人散シ或ハ策ヲ杖テ埃及ノ亞剌飛將軍ニ説クモノアリ或ハ蘇丹ニ僞聖魔治ノ軍議ニ參シ英人ニ抗スルモノアリ或ハ書ヲ夏東夢ノ城中ニ射テ將軍豪流呑ノ死ヲ惜ムアリ或ハ檄テ飛シテ印度ノ獨立ヲ勵スモノアリ時ニ或ハ情話愛戀ヲ説クモ曾テ淫猥ノ詞ナシ況ンヤ和漢小説ノ如キ藝妓娼婦ノ談ヲヤ奇遇離合ノ天運ヲ説ヒ徹頭徹尾鬼神妖怪ノ談ナシ其文辣鬱ニシテ奇氣アリ高ク秦漢ニ追リ其詩歌悲壯ニシテ慷慨ナリ遠ク魏晉ヲ凌ク蓋シ能ク一機軸ヲ出シテ一家ノ言ヲ爲シ今古ニ獨歩スルモノナリ固ヨリ近世濫行ノ新書ト比ヲ同フシテ視ル可カラス是故ニ之ヲ讀ム者忽ニシテ手舞ヒ足踏ミ忽ニシテ魂飛ヒ魄散シ忽ニシテ神郷ニ遊ヒ仙洞ニ逍遙シ忽ニシテ意氣飛揚古今ヲ睥睨シ忽ニシテ別ヲ傷ミ死ヲ弔ヒ卷ヲ擲テ罵ルモノアリ卷ヲ掩フテ涙下リ讀ムニ堪ヘサルモノアリ名ハ小説タリト雖モ實ハ即チ經國ノ大文字ナリ卷中揷ム所ノ愛蘭ノ慘狀支那人カ米人ニ輕侮セラレ會津城中烈婦和歌ヲ遺スノ諸圖ノ如キ人ノ意表ニ出テ人ヲ感激スル者尤多シ而シテ一篇ノ價ヲ問ヘハ僅ニ五十二錢タルニ過キス其用ヲ問ヘハ十九世紀ノ活歴史ヲ知リ歐人ノ政略ヲ察シ東洋ノ危勢ヲ詳カニス而シテ本邦ノ形勢ヲ論スルニ至リ慷慨悲壯男子ハ之ヲ讀テ報國ノ念ヲ固フシ淑女ハ之ヲ聞テ志操ヲ高尚ニシ婦德ヲ研キ夫兄ノ志ヲ奮ハシムヘシ貴賤ヲ論セス男女ヲ問ハズ目アルモノハ之ヲ讀ミ耳アルモノハ之ヲ聞ク可キノ書ナリ江湖ノ君子早ク御購觀世間ノ人ニ後レ賜フ勿レ

朝野新聞主筆　腸末廣先生著

政治小説　雪中梅

上篇一册　石版密畫入　洋製美本　正價金四十八錢　郵送税十八錢
下篇一册十一月十日發賣

鐵腸先生嚮きに二十三年未來記を草して滿胸の慷慨を發露されしが今又此の著作あり其の趣工ハ名士佳人の許多の艱難を經過し其盡力によりて完全なる國會の設立わりしとを小説體に綴りし者にて明治百七十三年國會設立紀念日ハ景況より筆を起し小女慈歎井生村樓の演説會名士の貧窶に逼り又ハ獄中に陷る等より箱根ハ浴樓にて才子佳人の相逢ふて心情を談ずるに至り文章の絶旋にして意匠ハ巧妙なるハ論ずるまでもなく當今政事社會の人情を穿ちて慨世憂國の意を寫し婦女子にまで政事思想を引起さしむべき一大奇書なり

○圭氏經濟學

米國ケーリー先生著　日本經濟會委員犬養毅先生譯

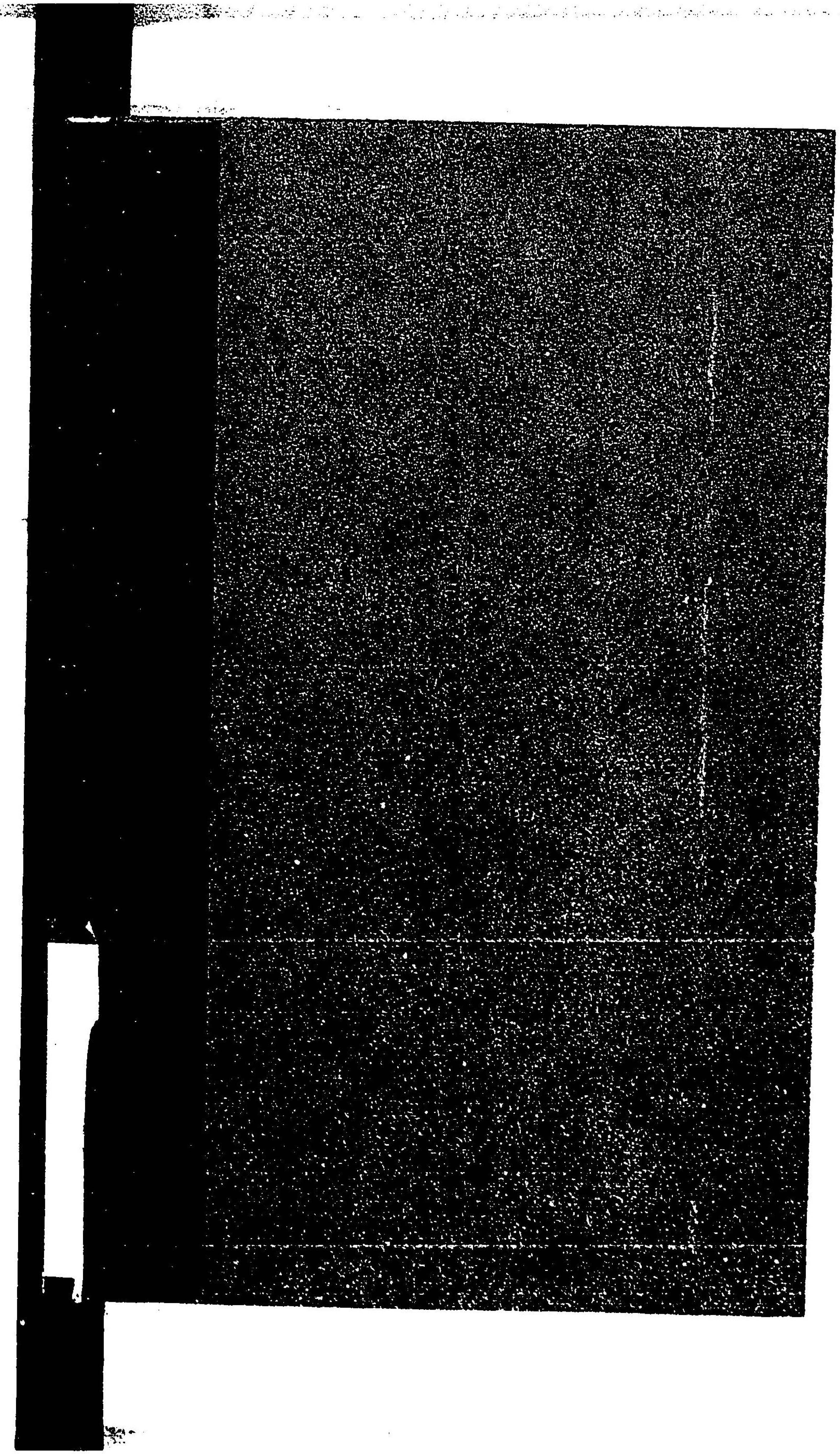
西洋綴	卷一	正價六十四錢	郵税二十錢
	卷二	同七十二錢	同二十錢
美本	卷三	同九十六錢	同二十四錢
	卷四	近刻	大尾

エト3C-68

是書ハ一名ヲ厚生學ト稱シ國家經濟學者ノ泰斗ケーリー氏ノ著セル所ナリ氏ハ米國ノ大家ニシテ當初英國派ノ經濟學ヲ研究シ頻ニ自由貿易ノ理ヲ說キシモ米國政府ノ此說ヲ實施シテ却テ工商業ノ衰頽ヲ招キ國家歲ニ困耗シ民庶日ニ窮乏シ殆ド貧弱ノ極點ニ達セシヲ見ルニ及ヒテ大ニ悟ル所アリ乃筆ヲ擲チ口ヲ鉗シテ自ラ歐米ノ諸國ヲ巡遊シ實歷八年ニシテ始テ英國派經濟學ノ誤謬ヲ看破シ玆ニ前人未發ノ眞理ヲ發見シテ遂ニ此書ヲ著セリ是ニ於テ米國政府復タ氏ノ言ニ從テ政略ノ方向ヲ一定シ因テ貧弱ヲ翻シテ富强ト爲シ歐亞諸國ノ亦企テ及ブベカラザル盛運ヲ致セリ抑其說ク所單ニ理論ニノミ馳セズシテ着實確正ヲ專トシ實業ト並行シテ毫モ相侵ス所アルコトナシ顧フニ我國ノ如キ工業未興ラズ商業未振ハサルコト亦米國前日ノ運命ト果シテ孰レゾ此時ニ當リ苟モ斯道ニ志アル者此書ヲ讀ムニ非ズシテ其レ何ノ書ヲカ讀ムベキ日本經濟會ノ委員犬養先生此ニ見ルアリ簡明平易ノ文字ヲ以テ此書ヲ譯述セリ世ノ殖産興業ニ志アルノ士ノ必一讀スベキハ勿論學風ノ改良ニ急ナル今日ニシテ師範學校幷ニ學術研究會等ニ於テ業ヲ修メラルヽノ君子ニ在リテハ當ニ購讀ヲ怠ル可ラザルモノト謂フベキノミ

○英國議院政治總論
○英國制度沿革史
合巻　尾崎行雄君譯　實價金貳拾貳錢五厘

○英國王權政府諸會議篇
○英國議院政府樞密院篇
合巻　同　同　金貳拾錢



913.6
0982s

094172-000-5

913.6-0982s

新日本

尾崎　行雄／著

M19

DBQ-1654